

# ミツバチの紫

—Bee Purple—

作・演出 萬野 展

## 登場人物

- ヒデコ（久保田秀子） キヤバレー「村崎」従業員。三十六歳。（杉山美奈）  
ジュンコ（阿部純子） キヤバレー「村崎」従業員。二十五歳。（宮崎奈々）  
ルリコ（柚木瑠璃子） キヤバレー「村崎」従業員。二十七歳。（長岡由起）  
マキコ（山田真樹子） キヤバレー「村崎」従業員。二十六歳。（石田愛）  
明珍英男（みよしげひでお） キヤバレー「村崎」従業員。二十五歳。（山崎健）  
雪村陸郎（ゆきむら りくろう） キヤバレー「村崎」従業員。三十二歳。（早矢仕裕之）  
木戸仙一（きと せんいち） 新聞記者。真樹子の義兄。三十歳。（一村宏幸）  
染谷準児（そめや じゅんじ） キヤバレー「村崎」の従業員。二十六歳。（立花和政）  
児島伸（こじま しん） キヤバレー「村崎」の従業員。二十歳。（宮本拓也）  
須王磐夫（すみ いわお） ナゾの男、実は「村崎」の所有者。三十八歳。（籬英夫）  
道化（だくわ） 「村崎」の道化。ショー進行役。年齢不詳。（萬野展）

【注記】当脚本の著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

ACT 1  
ムラサキ

【二〇一×年】

舞台のなかに小さなステージがある。  
ステージ上には誰もいない。

音楽の合間に客席のざわめき(このSEは開演前の客席を生録したものにエフェクトをかけて流す。従って初日はダミーである。)が過去からの銜ユエのように、途切れとぎれに聞こえてくる。

ステージを取り囲むように椅子が置かれており、そのうち四脚に女が座っている。ステージや後方に古いピアノがあり、その前の椅子にはやはり女が座っている。女たちは動かないが、故意に客席から顔を背けているようにも見える。

客席から見てほぼ正面上方にあるブースにも人影があるようだが、よくは見えない。

音楽は、古いアメリカのポップスのようだ。

やがてすべての音がやむと、目立たない身なりの男がドア(実際の劇場のドアが望ましい!)から入ってくる。

男はそれ以上足を踏み入れるのを畏おそれるかのように、しばしドアのそばに佇たたずんでいる。

その顔に浮かんでいるのは、懐かしさと驚き。  
やがて男はゆっくり空間に足を踏み入れる。

あちこちを眺める。  
男の目には、女たちの姿は映っていない。

男はステージに上がる。

感触を思い起こすように、床に手を這わせる。

一瞬、遠くから観客席のざわめきが戻ってくる。音楽とともに。

しかしそれはすぐ消える。

男の頭の中だけで、過去が息づいている。

男は我に還り、静かに立ち去っていく。

男の手がドアのノブにかかったそのとき――

ピアノの音が響く。

――ただ一音。小さく、しかし、はっきりと。

ピアノの前に座った女の指だけが動いている。  
男は振り返る。

音は繰り返され、力を得、フレーズとなり、リズムが生まれ、メロディを作り出す。  
椅子の上の動かない彫像たちが動き出す。

足が、指が、  
軽快なリズムを刻む。

ショーが始まろうとしている。

それは男だけが見ている過去の幻想なのか。  
男の表情が、驚きと怪しみから懐かしさと喜びへと変わっていく。

ショーが始まろうとしている。

【一九九九年】

ピアノのリズムに合わせて女たちが動く。  
ピアノが止み、一瞬の静寂。

大きな音とともに、道化登場。  
ステージ上に躍り出る。

道化

：レディース・エン・ジェントルメン。本日はようこそキャバレー・ムラサキへ…。今宵みなさまをファンタジーとノスタルジーの世界に口先ひとつでご案内するワタクシ口先案内人、またの名をクラウン、通称ステージジマスターと申します。…ああ、今日はお若い方もいらっしゃる。

お嬢さん、そちらのお嬢さん、あなたのお母様はだいじょうぶですか？ 夜な夜なあなたの日記を盗み読みしたりしてはいませんか？ そしてそちらのお母さん。お気をつけてください。お嬢さんの日記に誤字脱字があっても決して赤ペンで添削したりしてはいけませんよ。ときに貴女のお父上はご健在ですか？ 夜な夜な、あのミッドウエー海戦に散った戦友が夢枕に立って、「一生真面目に働いても自分の家一軒も持てないような、そんな日本しか作れなかったのかッ！」と責められてうなされてはいませんか？

：今宵はすべてを忘れましょう。そして許しましょう。お嬢さん、お母さんを許してあげてください。お母さん、父上を理解してあげてください。そして太平洋に散った戦士たちよ、この国を、ゆるしてあげてください。今宵ムラサキに咲く、小さな四つの夢にめんじて…

ご紹介いたします。ミス・ジュンコ。

道化の口上が続く。

音楽にあわせて椅子の上でポーズを変えていく女たち。

目立たないところに、メジャーを手にした男が登場し、あちこちを計測しはじめる。

ホール係が飲み物を持って登場。

ピアノ弾きに飲み物を渡す。

ホール係は、計測男に気づくが、他の誰も注意を払わない。

道化は女たちをひとりづつ舞台上上げる。  
女たちはひとりづつ客に挨拶。

ホール係は、計測男を気にしながらも、ブースに飲み物を運んだりしている。

道化、ピアノ弾きも舞台にあげてしまう。

道化と女四人のパフォーマンス。

ホール係、道化に飲み物を渡す。  
道化はホール係も舞台に引っ張り上げてしまう。

ホール係 え、いや、ちょっと…

女たち、ホール係の回りに集まる。

ホール係 …え、あれ、あの…

なにかをやらざるを得ないような雰囲気。

ホール係、迷った末やけくそでとても寒い芸（または破れかぶれの滅茶苦茶な動き）  
をする。

ホール係が芸をしている最中に、計測男は姿を消す。

ヒデコ …待った待った待った。

全員が踊りの動きをやめる。

マキコ （ブースに向かって）ストップ、ストップ！

ブースでヒデコが音を止め、ロクが明かりを地明かりに変える。  
全員がホール係を見ている。

ホール係 …。

ヒデコ なに、それ。

ホール係 え。

ヒデコ え、じゃないでしょ。

ホール係 ぼくのせい、ですか。

ヒデコ どう思う？

ホール係 …えーと…ぼくのせいかな、やっぱり。

ヒデコ うん。いい勘してるぞ。

ホール係 ありがとうございます。

ヒデコ うん。誉めてないぞ。

マキコ どうすんのよ、今がお客さんの前だったら。

ホール係 いや、どうすんのって言われても…

ジュンコ ねえ、さっ、最初からやるの？

マキコ （唸る）

ホール係 でもですね、言い訳させてもどうですわ、いきなりなんかやれって言われ  
ても…

ルリコ ねえ、あたし、まだ遅れてる？

マキコ ごめん、見てなかった。

ルリコ なにイ…

ジュンコ るっ、るっ、ルリちゃん、おっ、遅れてないよ。

ヒデコ ああ、ルリコちゃんよくなってるよ。

ルリコ …。（嬉しくてニヤニヤ笑つ）

マキコ ほら、ルリちゃん、またニヤニヤ笑ってるっ。

ルリコ …（顔を引き締める）

マキコ そうそう。

ジュンコ きゃっ、きゃっ、客をにらみつける…。

マキコ 客をにらみつける。

ホール係 あの、もともとほくはホール係なわけだし、バイトだし、まだ三日目だし…。

舞台にあがるなんて聞いてなかったし、あの…

ロク (ブースから) もう一回行きますかあ？

ヒデコ ちょっと待ってくれるう！…なんだっけ君

ホール係 だから、バイトです。まだ三日目で…

ヒデコ 名前を聞いているの。

ホール係 児島です。

ヒデコ 児島くん、ホール係だろうがなんだろうが、ひとたび舞台上がったらそれは

芸人。わかる？

ホール係(児島) いや、でもですね…

ヒデコ 言い訳無用。できませんわかりませんは禁句！ 何年やってんだまったく。

児島 ですから三日目…

ヒデコ よし、わかった！ とにかく、君には特別サービスでスペシャルショーを考えよう。

児島 え…

ヒデコ (ブースに) はい今日はおしまい！ サンキュー。

ロク 了解、お疲れさん。

ヒデコ お疲れさん。

マキコ お疲れ！

ルリコ お疲れさまでした。

ジュンコ おっ、おっ、お疲れさまあ！

児島 え、あの…

ヒデコ、音響、照明と相談するためブースに上がっていく。

マキコ (児島のそばに来て) まあさ、この店に来たらさ、あきらめて芸を磨くことがな。…じゃ、ヨロシクね。

マキコ、退場。

ジュンコ (児島のそばに来て) だっ、だいじょうぶ、さっ、最初は誰でもさっ、さっ、

そうだから。

児島 あの…

ジュンコ… ファイトっ。

ジュンコ、退場。

ルリコ…。

児島…。(目が合う)

ルリコ (ニタニタ笑う)

児島… (へラへラ笑う)

ルリコ、退場。

ヒデコ、ブースから降りてくる。

ヒデコ… よっ、と。

児島 あ、あの、ヒデコさん。  
ヒデコ ん。

児島 気になってたんですけど、あの…、さっきの人はどういう…？  
ヒデコ さっきの人ってなに？

児島 あの、さっき、店のなかを巻き尺で計ってた人がいたんですけど…  
ヒデコ はあ？

児島 気がつきませんでした？  
ヒデコ 全然。

児島 リハーサルの中で、ずっと、あちこち計ってましたけど。  
ヒデコ 男、女？

児島 男の人ですけど。  
ヒデコ 店のなかなんか計ってどうすんの。

児島 さあ…  
ヒデコ 幻でも見たんじゃないの。

児島 …。  
ヒデコ ま、いいや。それじゃ、楽しみにしててね。うんと素敵な演し物考えてあげる。

じゃあね。

ヒデコ、退場。  
児島、退場。

誰もいなくなった舞台に、計測男、再登場。  
あちこちを計る。  
計る計測男を舞台に残して、暗転。

ACT 2  
瑠璃子

音楽とともに、ステージに照明が入る。

道化がいる。

道化 一目出会ったその日から、恋が花咲くこともある。花の香りに誘われて、寄ってくるのはミツバチか。花は一輪、ミツバチ二匹。……どうしまじょう？

道化退場。

《シヨール》児島扮する令嬢に、ふたりの紳士（ジュンコ、マキコ）がアタックするコミカルなもの。

だじもの  
演物が終わって、一瞬の暗転後、ステージ照明ではない普通の明かりがつく。  
児島、衣装のまま、疲れ切ってステージ上でのびている。  
ブースからロクとヒデが降りてくる。

ロク ハイ、お疲れさん！

児島 どうも…。

ヒデ なかなかよかつたんじゃないの？

ロク よかつたよな。

ヒデ ロクさん寝てたじゃん。

ロク 寝てねえよ！

ヒデ 寝てました。

児島 寝てないんですよ。

ロク だろお。

ヒデ おまえこつから見えねえだろ。

児島 僕が寝てないんです。

ロク 当たり前だろ。

ヒデ 舞台で寝てたらおまえ、ヒデコさんに毒盛られるぞ。

児島 舞台のこと考えると緊張して夜眠れないんです。

ヒデ ふっん。

ロク そりやお気の毒。

児島 こんなことまでやんなきゃいけないもんなんでしょうかね…。

ヒデ え、やなの？

児島 ええ？

ロク イヤイヤやってるように見えないけど、ホントはヤなんだ。

ヒデ ヤならやめればいいのに。

児島 いや、別にやめたいわけじゃないんです。ただ、ホラ、忙しいじゃないですか  
ホールのほうも。ホントはバーテンの人がもっひとりいるって聞いてたし…

ヒデ ああ染<sup>シメジユン</sup>準。

児島 ソメジユン？

ロク 染谷準児って、このバーテン。そう言えば染準見ねえな最近。

ヒデ あいつ、里帰りですよ。実家。

児島 いつ戻って来るんですか、その人…

ヒデ 知らない。

ロク そんなことより児島くん。

児島 はあ。

ロク 君は、なんか隠してるんじやないのかなア。

児島 え。

ヒデ あ、とぼけている。

ロク すっとぼけている。

児島 …別に…、あの、なんのことですか。

ヒデ うすらとぼけている。

ロク とぼけサカムケている。(意味不明)

児島 は？

ヒデ 児島くん、ジュンコちゃんのことどう思う？

児島 …え、どうって…別に、どうとも…

ロク ほう。

ヒデ なんだ、そうだったのか。

児島 そうですよ。

ヒデ そうなんだってロクさん。

ロク そうなんだヒデくん。ハハハハハ。

ヒデ ハッハッハッ。

児島 ハハハ。

ガシツ、と児島を捕まえるふたり。

児島 ぐえ。

ヒデ そんなはずねえだろ！

ロク 吐け！ 吐いてしまえ！

ヒデ 全部わかってんだよ、ええ！

ロク 目が違うんだ目が。おまえの彼女を見る目は、ありゃあただごとじゃあねえ。わかるんだよ、そんなことぐらい。

ヒデ ブースで居眠りしてたってわかるんだよ。

ロク してねえうちゅうに。おまえが彼女を見る目はな、アカシアの木陰からひとり静かに愛しいものを見守る処女おとめのような輝きを帯びている。

ヒデ 護まもってあげたい。そして、包んであげたい。

ロク 乾かしてあげたい、そして、畳んであげたい。

ヒデ …？

ロク …。

ヒデ 洗濯物じゃないんだから。

ロク ソーリー。続けて。

ヒデ そっとう君の熱い視線に気がつかないヒデとロザンナだと思ってるの。え。どうなのっ。

ロク ロザンナ？

児島 …ど、どうなのって言われても…。違いますよ。そんなんじゃないです。

ロク まあだとぼけるかこの童わらわは。

ヒデ しぶといね。



ロク いいかね児島くん、別にボクたちは君のその萌えたぎる性欲、はじけ散る劣情を責めているわけではないのだよ。

ヒデ そ、そ。

児島 いや、劣情って…

ロク むしる君のためを思っただけ忠告をしようとしているのだよ、ボクたち。

ヒデ そ。

児島 忠告ってなんすか。

ロク あのね、この子たちはね、ダメだよ。

児島 ダメ？…ダメってなにがダメなんですか。

ロク 恋愛の対象にはならないってこと。

児島 …。

ロクとヒデ、やや調子を交えてクールに。児島で遊ぶのに飽きてきたらしい。

ヒデ おまえ、おかしいと思わないか、この店のこと。

児島 …。

ロク この女の子たち見ててどう思うよ。

児島 どうって…仲いいし、生き生きしてるし、いいなあって思いますけどね。

ロク うん、そうだな、よし！ 君の目は立派な節穴だ！ おめでとう！

児島 違うんですか。

ロク 違うない。

児島 じゃあ…

ロク 問題はだ、なんで彼女たちが生き生きしていられるかってことなのね。

児島 なんでそれが問題なんです？ 生き生きしてたらいいじゃないか。

ロク いけないなんて言ってないね。

児島 じゃあ、なんなんですか。

ヒデ だからね、どんなことにもそれなりの理由ってもんがあると、こうおっしゃって

るわけだよ、ロザンナさんは。

ロク ロザンナじゃないってゆうに…。あのね、生き生きしてるってことはね、生き

生きしなきゃいけない、やむにやまれぬ事情があるってことでもあるわけよ。わ

かるか？

児島 …。

ロク ここの子たちは仲がいいし、生き生きしてるよ。おまえの言う通りだ。こんな場

所は滅多にないよ。まるでそうすることで身を護ろうとしてるみたいだ。

児島 …。

ロク あの子たちを連れてきたのは、この店のオーナーだって話知ってるか？

児島 オーナー？

ロク この店の持ち主な。あの子たちはみんな、オーナーのこと神さまみたいに慕って

るよ。村崎さんって言うんだそうさ。店の名前と一緒に。

児島 だそうだって、ロクさんは…

ロク 俺らは顔も見たことないよ。俺の知ってる限りじゃ、店にあらわれたことは一度

もない。だから話だけさ。…女の子たちはみんな、ある時オーナーに出会って助

けてもらったって言うてるよ。自分を救い出してこの場所に連れてきてくれたの

がオーナーだってな。…わかるだろ。あの子たちはみんなそれぞれ、人に救って

もらわなきゃいけないところ、いたんだってことだよ。

児島 …。(なにかを考え込んでる)  
ロク (その様子を見て) まあ、おまえが取返して迷路にはまりこみたいなら、オレらは  
なにもいわねえけどな。

児島 …ロクさん、俺、

児島、迷いながらも、なにかを言おうとする。  
ジュンコ(普段着に着替えている)、登場。

ジュンコ ねえねえ!

ロク お、誰かと思えばジュンコちゃん。

ヒデ お疲れさん。

ロク どうしたの、慌てて。

ジュンコ き、き、聞いて聞いて。

ロク なに、どうしたの。

ジュンコ つっ、ついに、でっ、でっ、でっ、出た。

ロク …はあ?

ジュンコ 出たのよ!

ロク なにが。

ジュンコ ゆっ、ゆっ、ゆっ…

ジュンコ、両手を前に出して手首を垂らす。

ロク 幽霊。

ヒデ わかりやすい。

ロク ゆーれエ?

ジュンコ (頷いて) あっ、あっ、あたし昨日そっ掃除当番だったんだけどさ…。ひっ、  
ひとりでホールのそっ掃除したら、ぶっ、ぶっ、ブースのほうでさ…シュッ…  
シュッ…シュッ…って…お、音が、すっ、すっ…

ロクとヒデ、顔を見合わせる。

ロク それで、ジュンちゃん、ブース上がって見たの?

ジュンコ (首を横に振る) でっ、でも、なんか、かつ、かつ、かつ…(手振り)

ヒデ 影が見えた。

ジュンコ (ブンブンと首を縦に振る)

児島 あの…それってもしかして…

ヒデ 泥棒じゃねえの?

ロク ブースの様子、なんか変わってたか?

児島 いや、あの…

ヒデ あっ、そういえば俺の天童よしみのポスターがない…

ロク あれは俺が捨てた。

ヒデ なんでそういうことするの??

ロク イヤなんだよ、背中でコブシ利かされてるみたいで!

ジュンコ ゆっ、ゆっ、ゆっ…

ヒデ 幽霊?

ロク 天童よしみの幽霊かっ!

ジュンコ ちっ、ちっ、ちがうっ！

マキコとルリコ、会話しながら登場。(普段着)

マキコ …いやあ、ジュンちゃんのバナナにはやられたわあ。

ルリコ 知らなかったの？

マキコ いきなり来たんだよ。

ルリコ 楽屋の冷蔵庫にあと十本くらい入ってたわよ。

マキコ (唸る)

ロク お疲れさん。

ヒデ お疲れ。

マキコ お疲れ。

ルリコ お疲れさまでした。

児島 お疲れさまでした。

マキコ なに、ジュンちゃん、またあの話？

ジュンコ (激しくうなづく)

ルリコ あの話ってなに？

ロク 天童よしみの幽霊。

マキコ は？

ジュンコ だから、ちっ、ちっ、

ヒデ ちがうって。だいたい生きてるだろ、本人。

マキコ お湯わかしてる幽霊の話じゃないの？

ヒデ お湯？

マキコ シューシュー音がしてたんでしょ？

ルリコ なに、それ？

ジュンコ シュツ…シュツ…シュルルッ…って。

ヒデ それ、お湯わかしてる音なの？

マキコ 違うの？

児島 あの…

ロク わかったっ。夜な夜なあらわれて赤いキツネを作る武田鉄矢の幽霊…！

マキコ・ルリコ はあ？

ヒデ 生きてるって言うてんだろ。

ロク あいて。殴ったな、おまえ…。

児島 あの、ジュンコさん！ それってメジャーの音じゃないですか？

一同、児島を見る。

ジュンコ めっ、めっ、メジャー？

ヒデ メジャー？

児島 メジャーです。こういう、計るやつ。

マキコ 巻き尺ってこと？

児島 シャツで音がするでしょ。そんな音じゃなかったですか？

ジュンコ うーん…そう言われれば…(思い出すように考え込んでいる)

児島 ぼく見たんですよ。この前リハーサルやってたとき。店のなかをめちゃこち計ってる男がいたんです。

ロク メジャーで？

児島 ええ。それでヒデコさんに訊いたんですけど、知らないって…。

マキコ なにそれ。ルリちゃん見た？

ルリコ 見てない。

ジュンコ みつ、見てないよね。

マキコ ホントなの？ 店のなかなんか計ってどつするの？

児島 それはほくにも…

ヒデコ どんなヤツなんだよ。身なりとか。

児島 普通っぽい格好でしたけど、とにかく脇目も振らずに計ってるんですよ。

ロク じゃ、なに、そいつが夜中にブースのなかを計測してたわけか…？

ジュンコ まつ、まつ、真夜中の…

マキコ 計測男。

ヒデコ 変態じゃないだろうな。

マキコ 真夜中の変態計測男。

ロク …なんか怖いぞ。

わいわいやっているなか、ルリコだけ、ぼつとなにか考えている。

マキコ どしたの、ルリちゃん。

ルリコ ん？…ううん、なんでも…

ヒデコ(普段着) 登場。

ヒデコ あれえ、まだいたの、みんな。…児島くん、その格好で帰るつもり？

児島 あ。

ヒデコ あのさ、明日の休み、もう一本新しいの作ってみようと思うんだけど、みんな  
いい？

マキコ いいです。

ジュンコ おつ、おつ、オッケー。

ロク 俺らも要ります？

ヒデコ ううん、あたしただけでいいわ。

マキコ じゃあ、早く帰って寝とこつと。

ロク じゃ、上がるか。

ヒデコ よっしゃ、お疲れ。

それを潮に、全員、「お疲れ」を言い合いながら、退場していく。

児島 あの、明日は…

ヒデコ 児島くん、さっきの、よかったじゃない。やっぱりやれば出来るのよ、あなた。

児島 はあ、ありがとうございます。

ヒデコ その調子。明日も頑張ってるね。

児島 あ…やっぱり。

ヒデコ じゃ、お疲れ。

児島 …あ、待ってくださいよ、ほくも帰ります。

ヒデコ まずあんた着替えなさいよ。

ヒナコ、退場。 兎島、退場。

計測男、登場。  
例によって店のあちこちを計りはじめる。  
ルリコ、再登場し、その様子をじっと見ている。

ルリコ (恐る恐る声をかける) あの、  
計測男 … (手を止め目を上げるが無言)

見つめ合う沈黙。

計測男、目をそらして計測を続けようとする。

ルリコ あなたは誰ですかとかなにを計っているんで  
計測男 … (律儀に手を止めて目を上げて聞いている)

ルリコ すかとか計ってどうするんですかとか、そんなことわたし、聞きません。

計測男 …。

ルリコ わたしも計っていいですか。

計測男 …。

ルリコ … (メジャーを出す)

計測男 … (力強く頷く)

ルリコ、計測を続ける計測男の動きに合わせて移動しつつ計測男の体のサイズを計りはじめる。

ふたりはしばし、計測に熱中する。

ルリコは計測男の全身を計り終える。

計測男 (計測を続けながら) もういいんですか。

ルリコ はい。ありがとうございます。

計測男 メモしなくてもいいんですか。

ルリコ 全部憶えましたから。

計測男 ホントに？

ルリコ はい。

計測男 右足。

ルリコ 25・7センチ。

計測男 左腕。

ルリコ 57・2センチ。

計測男 股下。

ルリコ 71・9センチ。

計測男 首回り。

ルリコ 37センチジャスト。

計測男 やあ、すごいな。

ルリコ そんなことないです。

計測男 … よし、と。

計測男、登場以来はじめて、計測の手を止め、メジャーをしまいこむ。  
計測男、座って休んでいる。

ルリコ あの…どうなさったんですか？

計測男 どう、とは。  
 ルリコ 計らないんですか。  
 計測男 ああ、終わりです。  
 ルリコ 終わり？

計測男 終わりです。…終わりだとマズいですか？  
 ルリコ い、いいえ…。でも、あの、え？ 全部？  
 計測男 はい、全部。

ルリコ この店、全部？

計測男 なにからなまでに。…まあ、こんなこと業者にやらせればいいんですけどね。  
 なんでも自分でやらないと気が済まないですよ。

ルリコ ギョーシヤ？

計測男 凝り性なんでしょうね。調べるとなると徹底的にやっちゃうんですよ。高校のとき世界史が好きだったんですけど、ほら、授業ってポンポン飛ばしてくじやないですか、それがいやで、自分で教科書の最初から勉強していったんです、本とかで調べてね。そしたら、卒業するとき、先かんぷリア紀の真ん中へんでした。

ルリコ 先…かんぶりあ、き？

計測男 恐竜出るとこまで行きませんでした。

ルリコ …はあ。

計測男 まあ…(店を眺め回して)やっぱり自分のものは把握しておきたいじゃないですか、細かくね。すぐ売っちゃうことになるかもしれないんだけど…。  
 ルリコ 売る？ 自分のものって…。あの、なんのこ言うてるんですか？

計測男、謎めいた目でルリコを見ている。

ルリコ …。

計測男 ウエスト 胸回り。

ルリコ 84・6センチ。

計測男 (がつくり頂垂れる)…運動不足だな…。

ルリコ …あの。

計測男、ルリコに近づき、名刺を渡す。

計測男 これ、私の名刺です。計ってくれてどうもありがとうございます。

ルリコ あの…！

計測男 光栄でした。柚木瑠璃子さんにスリーサイズ計ってもらえるなんて。

ルリコ …。

計測男 あなたの服、私好きでしたよ。

ルリコ …。

計測男 どうしてデザイナー、やめちゃったんですか？ もったいない。

ルリコ、ショックを受けて立ちすくんでいる。

計測男 いや…他人が口を挟むことじゃありませんでしたね。すいませんでした。…それじゃ。

ルリコ びびびび…

計測男、足を止めて振り返る。

計測男 言ったでしょう？ 細かく調べないと気が済まないって。…それじゃ、また明日。

計測男、退場。

ルリコ、名刺を持ったまま立ちすくんでいる。

明かりが変わっていく。  
光のなか、ルリコが振り返ると、それは瑠璃子になる。

瑠璃子

…私がデザイナーをやめた原因<sup>わけ</sup>、それはひとことと言えばジェラシーでした。飛ぶ鳥を落とす勢いの新進デザイナー 柚木瑠璃子。それが二十歳のときの私でした。ある雑誌にたまたまとりあげられたのがきっかけで、マスコミにも出たし、外国に行く話もあって、凄いスピードで回るメリーゴーラウンドに乗せられたみたいに、私の周囲の世界がぐるぐる回り始めていました。

…私に才能があったのか、なかったのか、それは今でもわかりません。ただ私は服を作るのが好きなだけだった。たくさんの人たちが、才能があると言って、そしてそういう人たちは決して信じてはくれませんでした。有名になったり、世の中に認められたりすることが、いいことだとちつとも思えない人間もいるということを。だから怖かったです。死ぬほど、怖かったです。男の人のジェラシーというものが、女なんか比べ物にならないほど強烈なものだということを、私は知らなかったんです…。誰に助けを求めることもできずに、わたしは結局全部のことから逃げ出してしまいました。文字通り、仕事も、生活も、全部。それからの私は、抜け殻でした。世間という場所が怖くて、どうしようもなく怖くて、私は隠れるように暮らしていた。…そして私はオーナーに出会ったんです。

キャバレー・ムラサキにいたころ、私はオーナーのことをよく憶えていますでした。私を救い出してくれた人のことなのに、顔も、声も、思い出そうとすると記憶の彼方に霞んでしまうのです。当時、私はそのことを不思議だとは思いませんでした。ただオーナーと出会って、あの場所に…ムラサキに連れてきてもらって、そのおかげでとても楽になれたことだけは確かなことだった。それで私には充分だった。そのときはそれでよかった。

でも今思えば、キャバレー・ムラサキに計測男が現れたあの日。私が数年ぶりにメジャーを握って、計測男のスリーサイズや首回りや足のサイズやなんかを計ったあの日。あの日が、そのあと起こったすべての出来事のはじまりだったような気がします。

あの場所。そこはムラサキという名のキャバレー。とても不思議な場所でした…。

瑠璃子を残して、暗転。

ACT 3 須王

次の日。  
明るくなる。ブースにジュンコ、舞台にヒデコ、ルリコ、児島、ピアノにマキコが  
いる(全員普段着)。

ジュンコ こっ、これでいいー？

ヒデコ オッケーよ。

児島 あの、なにをするんですかね？

ヒデコ ちよっと待ってね。

ヒデコ、うろろろしながら考え込んでいる様子。

児島 ……？

ルリコ (小声で) 降りてきているから。

児島 なにが…？

ルリコ、口を指を当てて「静かに」のサイン。

ヒデコ、宇宙の彼方から靈感を得ているようなポーズをしている。

ヒデコ ……よし。ルリちゃん。

ルリコ はい。

ヒデコ 森の妖精。

ルリコ ようせい…。

ヒデコ 数千年の長きに渡り、人目に触れることなくひっそりと美しく咲く一輪の水仙。

ルリコ ……(必死で考える)

ヒデコ 照明。深いふかい森の底。陽の光の決して届かない、霧に霞む聖域。

ジュンコ、明かりを調整しはじめる。

ヒデコ (ピアノのマキコに) 幻想的で神秘的、それでいてどこか懐かしい旋律。(児

島を見て)……キコリ。…よし、行くよ！

児島 ……きこり？

ヒデコ ハイ！

ヒデコ、手を打つ。

ジュンコ、明かりを調整する。なんだか青っぽくなる。

マキコ、とりあえずそれらしい音を出す。

ルリコ、妖しげな動きをはじめ。

児島、周囲の変化を見て、慌ててキコリらしい動作をはじめ。

妖精がキコリに近づく。キコリは木を切る。

妖精とキコリの目が合う。

キコリ (笑顔でアイサツする)……どうも。

ヒデコ スト——ッブ！

ピアノが止む。



ヒデコ なんだ、それ。  
児島 いやあ、キコリ…。

ヒデコ 「どーもあ」ってなんだ、「どーもあ」って。  
児島 いやあ、気のいいキコリ…。

ヒデコ だめ。全然だめ。わかってない。やめ。…ジュンちゃん！ これじゃ海の底  
だよ！

ジュンコ ごめえん！

児島 でもあの…数千年も人目に触れてない森のなかなんですよ？ キコリなんかい  
ますか？ それにあの…

ルリコ、口に指を当てて「静かに」のサイン。  
ヒデコ、再び霊感を探っている。

ヒデコ (ピタリと止まる) アルプス！ 輝く太陽。澄み切った空気。牛の去勢に精を  
出す村娘。素朴で健康的なエロティシズム。

ルリコ、必死で考えている。  
あわてて照明を調整するジュンコ。

ヒデコ どこまでも青い空に溶けていく口笛の響きのような、悲しいまでに純粹無垢な  
旋律！ (児島を見て) ……きこり！…ハイ、スタート！

なんだか昼間っぽくなる。

マキコ、とりあえず牧歌的な音を出す。

ルリコ、健康的な動きをはじめる。  
キコリは木を切る。

村娘はキコリに気がつく。  
キコリと村娘の目が合う。

キコリ (笑顔でアイサツする) ……いい天気っすね。

ヒデコ スタ——ッブ！

ピアノが止む。

ヒデコ ……ルリちゃん。

ルリコ ハイ…。

ヒデコ それじゃ妖精とおんなじだよ。

ルリコ ……。

ヒデコ ちよっと休憩ね！

マキコ (立ち上がって) ジュンちゃん、なんか飲むう？

ジュンコ おっ、おねがあい！

マキコ ちよっと待っててー！

児島 あ、俺やりましょうか。

マキコ だいじょぶ。

マキコ、退場。  
ジュンコ、明かりをいじっている。

ヒデコ ……なんか元気ないね。どうしたの？

ルリコ ……  
 ヒデコ なんかに気になってるごときでもある？  
 ルリコ …… ヒデコさん、これ…。

ルリコ、計測男の名刺を出し、ヒデコに渡す。  
 少し離れたところで、児島はふたりの様子を見ている。

ヒデコ …… なあに、これ？

ルリコ 計測男の名刺…。

ヒデコ ケイソクオトコ？ …… ああ、ジュンちゃんたちが言った、お店計ってるって言う？

ルリコ その人、わたしのこと、知ってた…。

ヒデコ …… ルリちゃん？

ルリコ わたし…… なんだかとも…… 胸騒ぎがするの。

ヒデコ …… これ、なんて読むのかな…… すみ？ いわお？

ルリコ その、肩書きのところ……

ヒデコ 肩書き？ ええと、…… 須壬不動産管理サービス、代表……

マキコ、駆け込んで登場。

児島 マキさん、どうしたんです。

マキコ、舞台に倒れ込んで激しい息。

児島 マキさん！

ヒデコ ちよつと、どつしたのよ。

ヒデコ、ルリコ、寄ってくる。  
 ジュンコ、ブースから降りてくる。

ヒデコ ちよつとマキちゃん？

ジュンコ どつ、どつ、どつ、どつ、どつ……(どつしたの！、と言いたい)

マキコ でつ、でつ、でつ、でつ……(出た、と言いたい)

ジュンコ なつ、なつ、なつ、なつ……(なにが、と言いたい)

マキコ けつ、けつ、けつ、けいっ、けいっ……(計測男が出た、と言いたい)

ジュンコ ええいじめったい！ キリキリしゃべれ！

マキコ 計測男が出たのよ！

計測男、メジャー片手に入り口に登場。

計測男 あのお…。

マキコ あいつよ！

児島・ルリコ 計測男！

計測男 …… いい天気っすね。

計測男、入り口から悠々と入ってくる。

計測男 トイレ、計り忘れてたんですよ。これでホントに終わりです。昨日はどうも、ルリコさん。

ルリコ ……。

マキコ 昨日って、なに？ どついついこと？

ヒデコ あんた、なんなの？ なんで店のなにか計ってんのよ。

計測男 ああ、ちよつと落ち着いてください。すいません、順を追って説明しますから…まずわたし、須王警夫と申します。不動産屋です。以後お見知りおきを。

マキコ 不動産？

ヒデコ、マキコに名刺を渡す。  
それをのぞき込むジュンコ。

計測男（須王） 柚木さんとは、昨日お話ししましてね。まあ、性格なんですけど、物

件を右から左に流して薄利多売っていうのが性に合わないんですよね。つい、深入りしちゃってますな。

ジュンコ なつ、なつ、なつ…

ヒデコ なんの話かさっぱりわからないわ。

ジュンコ そうよ！

須王 まあそう急がないで。すぐわかりますよ、阿部純子さん。

ジュンコ…

須王 あなたも…。お水でも持ってきてましょつか？ 山田真樹子さん。わたしあなたのレコード一枚持ってますよ。

マキコ…。

須王 いろいろ調べました。この店のこと。面白いですね。とても面白い。でも残念なことに、経営状態は最悪です。

須王、少し黙ってためらっている。

須王 わたしとしては、このままの状態が続く限り、この店は閉めざるを得ません。残念ですが。

ヒデコ なにを…なにを言っているの？ ぜんぜんわからない！

須王 この店が毎月出している膨大な赤字。固定資産税。誰が払っていたとお思いですか？ そう、村崎さんですよ。…大した道楽ですね。わたしにはちよつと理解できないが、ひよとして税金対策かなと思っただんですが…

マキコ オーナーは…オーナーはそんな人じゃないわ！

須王 でも違うようです。村崎さんはこの赤字をまったく申告していない。でも、わたしはそうはいかないんですよ。生活もありますしね。そうでしょう、久保田秀子さん。

須王の口調はむしろ同情的に優しい。

須王 村崎さんがどういふおつもりでこついつい店をやってらっしゃったのか、あなたはご存じですか？

ヒデコ ……（心ここにあらずの様子で、首を横に振る）

須王 そうですか。本人に直接訊いてみたい気もしますが…。村崎さんはどうやらもう日本にはおられないようだし、連絡不能なんです。この店の売買も代理人を通してだった…。

女たち、言葉をなくしている。  
座っているものは立ち上がる。  
全員、金縛りにあったように動かない。

須王 ……この際はつきり申し上げたほうがよさそうですね。村崎さんはこの店を手放されたんですよ。

一同、氷のように黙り込んでいる。

須王 で、その新しい持ち主というのがこの私というわけですね。

須王、女たちの様子を見ているが、いたたまれぬというように目を背ける。

須王 一ヶ月、差し上げます。キャバレー・ムラサキ最後の一ヶ月です。その間に経営状態が好転しない場合、この店は閉店します。そのあいだに、皆さんの身の振り方を考えるもよし。お好きに過ごしてください。わたしと村崎さんのあいだで取り交わされた正式な契約書のコピーを楽屋に置いておきました。お疑いならどうぞご覧ください。

……とても残念です。どっぞお気を落とさずに。…失礼。

須王、静かに退場。

女たち、相変わらず言葉もない。

児島 ……ヒデコさん。

ヒデコ ……。

児島 ジュンコさん。

誰も、口をきかない。

ルリコ (ぼつりと) うそだよ。

児島 ……。

ルリコ そんなのうそだよ…！

児島 ぼく…書類確かめてみましょうか。

マキコ ……出て行って。

児島 マキコさん…。

マキコ 出て行って！ 今すぐ！

児島 ……。

児島、退場。

立ちつくす女たち。

暗転。

ACT 4 真樹子

【二〇一〇年】

男はひとりステージの端に腰掛け、昔に思いを馳せている。

その背後に忍び寄る黒い影。

黒い影は男の背後に立ち、手にした棒のようなものをゆっくりと振りかぶる。気配に気づいた男が振り向く。

ほとんど同時に影が渾身の力で棒のようなものを振り下ろす。

男 ……んじゃあ！

あまりの突発事にわけの分からない音を発して男が反射的に身をかわす。バアンと床が鳴る。

男、間一髪で避け、床に転がり、そのままいざって逃げる。

影男 ……。

男 ……お、な、だ、ちよ、…

オイ、なんだよ、誰だよ、ちよつと待てよ、というような意味のことを言いたらしいが驚きのあまり声にならない。

影男が無言の気合いを発し宙を舞い再び男を襲う。

男 おわあ！

再び逃げる男。

男のいた空間に殺気とともに突き刺さる影男の棒（竹刀のようなものらしい）。

男 ……なんなん、なん、（まだ口が回らない）

影男 けえっ！

男 なあっ！

怪鳥の如き掛声とともに三度襲う影男。かなり身が軽い。

男は椅子などを楯に必死で逃げ回る。

暫し無言の追いかけて続く。

影男 ……きええっ！

気合いは激しいが動きから殺気が感じられなくなってくる。

影男 ……きええっ！

影男、自分の持った棒に足をとられて転ぶ。

息がそうとう荒く、すぐには立ち上がれない。

その様子をみて男も床（もしくは椅子）にへたり込む。

男 ちよ……ちよつと待ってくれ。ちよつと落ち着けよ……。いきなり……なんなんだよ……。

影男 ……きええっ（体は疲労のためほとんど動かず、棒がちよつとだけ動く）

男 キエじゃないよ……冗談じゃないよまったく……あ、あんた……あんた誰なんだよ……

影男 ……お……お……おまえこそ、だ、だれげほげほ……げほげほ……は

男 ……。

影男 げほ、くほ、ほ、げほげほがほ（自分の背中を指さす、さすってほしいらしい）  
 …。

男、用心深く近寄って竹刀を遠ざけ、背中にまわって渋々さすってやる。

影男 …けほっ、えほっ……けへん……（咳がおさまり、首をねじって涙目で睨みつける）…あ、あやしいやつめ。

男 誰がだ！ 誰がどう見たってあんたのほうに怪しいだろ！

影男 なにをいつか。いいか、おれはな、おれはこの警がほげほげほくほがほ。  
 …いい加減にしるよ…。

男、うんざりしながらも、人も良くまた背中をさすっている。

影男、咳き込みつつ首から下げた身分証明証ケースを、男に突きつける。

男 …（それを読んで、思わず相手を見る）…警備員？ あんたが？

影男、頷く。

男 警備主任…キド、センイチ。………木戸仙一？

影男（木戸）、立ち直り、飛び上がって離れる。その拍子に男の手からカードケースが飛ぶ。木戸、男が遠ざけた竹刀を素早く拾って構える。

木戸 …鍵こじ開けて入ったろつが！ このビル荒らしが！ 観念しろ！

男 木戸…さん？…木戸さんじゃないか！

木戸 なれなれしく呼ぶなつ。きえっ！（襲いかかる）

男 （よけつつ）まっ、待ってくれ木戸さん！

木戸 問答無用！ くええっ！

男 毎朝新聞社会部の木戸仙一さん！

木戸の動きが止まる。

木戸 ……。

男 ……でしょ？

木戸 ……おまえ、誰だ…？

男 鍵、こじ開けたんじゃないです。

木戸 ……。  
 男 持ってたんです、ずっと。ずっと忘れてましたよ、この店のこと。でも鍵だけは持ってたんです。

木戸 ……。

男 仕事でこの街に来て、本当に久しぶりにこのことを思い出したんです。この街で昔働いてたこと。それで分かったんです。この鍵はこの店の鍵だったんだって。

木戸 ……おまえ…。

男 この店がなくなって、ここにいたみんながバラバラになってから、もう……十年ですよ。

木戸の手から滑り落ちた竹刀が、音を立てて床に転がる。

木戸 ……染<sup>ソメジユン</sup>準…か…。

男 本当に…お久しぶりです、木戸さん。

木戸の体から力が抜ける。よろよろと男に近づく。

木戸 … ホントに……染谷くんか……。変わったなあ…。

男（染谷） 木戸さんだって…。

染谷 木戸さん…新聞社やめたんですね。

木戸 ああ。

染谷 警備員で、もしかして…

木戸 うん。須王さんの世話でな…。

しばし、お互いを見つめる。  
懐かしさ、うれしさ、照れくささ、いろんな感情。

木戸 （思い出したように笑いつつ）染谷くん、おれさあ、  
染谷 なんですか。

木戸、くつくつと思出し笑いをしている。

染谷 なんですか、気持ち悪いな。

木戸 こないだ、来たよ。

染谷 なにがです。

木戸 送ってきたよ。役所から。

染谷 なにを。

木戸 介護保険手帳。

染谷 …。

木戸 思い出したろ。

染谷 …ああ。

木戸 これからは安月給から天引きってわけだ。

染谷 ………そうか。…そんなことありましたね。

木戸 うん。それでオレも思い出したんだ。ここで…

染谷 そうだ、ここで…みんなで…

木戸 そうだよ。…懐かしいだろ？

染谷 ……ええ、そうですね。

ふたりは追憶に身を任せながらも、ひとつの疑問を回避している。  
女たちは今、どうしているのか、という疑問を。

染谷 … 木戸さん、マキコさんはあれから…

木戸 （首を振る）離婚したんだよ、結局。山田家とは関係なしだ。

染谷 音信不通なんですか。…マキさん、まだピアノ弾いてるんですかね…。

木戸 ……どうかな。

染谷 さっきね、ピアノが聞こえたような気がして…。

ふたりピアノのほうを見る。ピアノが聞こえはじめている。  
明かりが変わっていく。

【一九九九年】

ステージ上にはマキコがいる。  
ブースにはヒデがいる。居眠りをしているのか、動かない。

曲はピアノからではなく、スピーカーから流れてきている。それはもの悲しく、陰鬱なピアノソロである。

マキコはそれを聞いている。  
ロク、スポーツ新聞を片手に登場。（ブースからではなく、他のデハケがよい。）

ロク いやあ、なんか今日雨降りそうだな（公演当日の天気に合わせて、  
適当にアレンジすること）。…なんだこれ…。

ロク、聞き慣れない暗い曲に戸惑いつつ、新聞を広げ読み始める。

ロク おつ！『阪神連夜のフタケタ安打』！ よおしよおし。…それで三連敗ってどういふことなんだ…。『ミスターにんまり、ノムさんダンマリ』…。うん。そうだろうそうだろう。…おお！ 堀ちえみが！ 『堀ちえみ、

暗いピアノ曲が暗く盛り上がる。

ロク できちゃった再婚（…）ブースに怒鳴る（…）おい、ヒデ！ ちょっとこれやめろよ！

ヒデ、眠っている。

ロク なんか、なんだよ、もうちょっと明るい曲ないのか、おい。ヒデ！ おーい！ 寝てんじゃねえよ！

マキコ あたしが聞いているの。

ロク …。

マキコ うるさい？ とめようか？

ロク ああ、いやあ、いいんだよ。

マキコ …あたしが好きだった曲なんだ。

ロク そうなんだ。

マキコ 昔はね、こんなのばかり弾いてたよ。

ロク ふうん。

マキコ 堀ちえみってさ、旦那さんに暴力ふるわれて離婚したんだよ。

ロク ああ、そうだった？

マキコ そういうのって、どう思う？

ロク うーん。まあ、暴力はイカンよね。

マキコ イカンけどさ…。暴力ふるうような人と結婚して、暴力ふるわれて離婚して、それでまた違う人と結婚して…。次の人が暴力ふるわないって信じてるのかな。

ロク そうだろう。

マキコ どうして信じられるのかな。暴力ふるわれて、裏切られて、それで違う人をまた信じて…そういうことって、どうしてできるんだろう。

ロク 学習したんじゃないの。

マキコ 賢くなったのかな。強くなったのか…。それとも？

ロク …。

ロク、ちょっと黙っているが、新聞を畳んで、マキコに話しかける。

ロク マキちゃんね。

マキコ ん？

ロク こんなこと別にオレが言うことじゃないんだけど…。

マキコ なに？



ロク やっぱ、オーナーが戻ってくるって信じてんの？  
マキコ …。

ロク オーナー戻ってきてなんとかしてくるって、ほら、ルリちゃんなんか、信じ切っちゃってるみたいじゃない。

マキコ うん。口に出さないけど、ジュンちゃんも、ヒナコさんも、みんなそう思うって思う。

ロク マキちゃんは、よ。

マキコ …。

ロク 信じてるの？

マキコ …。

マキコ、じっと自分のピアノに耳を傾けているように黙っている。

ロク まあ、オレたち男連中はさ、オーナーのこと知らないし、顔見たこともないからさ、正直、よくわかんないんだよ。その…みんなのさ、オーナーに対する…なんて言っの…

マキコ 信頼？

ロク うん。信頼、か。そうだな。

マキコ 信仰って言いたいんじゃない？

ロク …。

ロクは図星を突かれて、ちよつと黙る。  
ちらりとマキコの顔を見て笑い、頷く。  
その笑顔は率直で、照れも嫌味も感じられない。  
それを感じ取ったマキコも笑顔を見せる。

マキコ ロクさんてさ、男らしいよね。

ロク そうかね。

マキコ うん。とつても男らしい。…それでね、あたしたちはみんな、イヤになっちゃうくらい女らしいんだと思う。

ロク …。

マキコ 別に自慢じゃないだよ。ホントに、イヤになるくらい、女らしくて、女臭くて、それで…そこから逃げたくて…でも…

ロク マキちゃん。

マキコ オーナーは…村崎さんという人はね、あたしを…たぶんみんなを、そんなイヤなところから連れ出して、ここに連れてきてくれたんだと思う。ここで少し休んでいなさいって、そう言ってくれたんだと思う。少なくとも、あたしにとつては、そう。だから、本当はもういいのかもしれない。

ロク …どんなヤツなのよ、オーナーって。

マキコ それがね…(おかしそうに小さく笑う)あんまりよく憶えてないの…。

ロク 憶えてないって…？

マキコ オーナーに出会ったときのこと。オーナーの顔とか…

ロク 顔も？ 全然？

マキコ (頷く)これもみんなには言えないよね。こんなに信頼して、こんなに感謝してる相手の顔も、どこで知り合ったのかも憶えてないなんてさ。

ロク …。

マキコ オーナーに出会う直前の時期のことは、ぼんやり憶えてるんだ。あたしね…宗教に入ってた。

ロク 宗教。

マキコ そう。世間から見たら如何<sup>いか</sup>わしき満点の新興宗教。でも、あたしには、他にどこにも、行くところがなかった…。

ブースのヒデは、マキコの語りが始まるとともに、それまでのピアノ曲から、クロスフェードで違う曲に乗り換えていく。(この所作は観客に見えていてよい。また照り明変化がある場合、ヒデがそれを行う。)

真樹子 …ずっと、ピアノを弾いているときの顔を写真に撮られるのが嫌いでした。

ちよつとした親戚の集まりでピアノを弾いて見せるとき、わたしは写真を撮られると決まって、弾くのをやめてしまう。小学校のとき、発表会やコンクールでも、友達が撮ってくれた写真、ありがとと言って受け取って、こっそり破いて捨てた。そのうちに、誰もわたしには写真を見せなくなった。だってそれはお人形の顔だから。人形がピアノを弾いている。ガラス玉の目。つめたく冷えた頬。中途半端な形のまま半開きになって動かない唇。それは、死んだわたしの顔。写真に写っていても、わたしはそこにいなかった。わたしはいないのに、わたしのような形をしたものが、ピアノの前に座っている。

いつからそんなふうになるようになったのか。ピアノが好き、わたしはずっとピアノが好きだった、でも、いつからピアノを弾く自分を死人だと、人形だと思ってしまうようになったらう…。ずっとわからなかった。写真さえ見なければ、そのことは忘れていられる。そのことを忘れて、わたしはピアノに向かい続けていました。ピアノに向かつていれば、人形になっていれば、なにもかも気にせずにいられるから…。それはそれで、幸せだった。

全部が変わってしまったのは、私の最初のCDが出ることになったときのお祝いのパーティ。身内だけの小さなパーティだったけど、その席に、あの男が来た。私の最初のピアノ教師。まだ十歳にもならなかった私に、たった一年間、ピアノを教えた男。最初は誰だかわからなかったの。でも思い出してしまった。私はその男が怖かったこと。その男が私にしたこと。私をピアノに向かわせて、一年間その男が私に続けたこと。毎日、毎日…。人に見せてはいけない場所に無数についた痣<sup>あざ</sup>。私は忘れていた。ずっと忘れていた。でも、痣は消えても、ずっと消えずに残っていた恐怖が、ピアノの前の私を人形にしていた。その男が、目の前でニコニコ笑っていた…。私は…私は…！

ロク …マキちゃん、もういいよ…。

ロクが話しかけると、真樹子はマキコに戻る。

マキコ …最初に最後のCDになっちゃった。…それからあたし、弾けなくなった。ピアノが怖かったの。家を離れた。誰とも会いたくない。隠されていた恐怖がくると裏返ってしまった。人が信じられない…。

ロク それで宗教に？

マキコ うん、そう。

ロク そこでオーナーに出会った？

マキコ ……わからない。でも、違うと思う。…オーナーと出会ったのはもう少しあとだと思う。たぶん…

ロク 覚えてないんだ。でもその宗教団体はやめたんだろ？ 今でもあるの？  
マキコ ……。

ロク ああ、無理に思い出さなくてもいいよ。マキちゃん、もうよそつや。  
マキコ ……最近ね…少しづつ…思い出せるようになってきた気がするんだけど。でも、  
駄目だ。記憶が混ざっちゃって。宗教やってたころから、ルリちゃんや、ジュン  
ちゃんのこと知ってたよつな…

ロク え？ だって…

マキコ そうよね、この店に来てはじめて会ったんだもんね…。なんか混乱してる。

ロク、マキコの言ったことをやや考え込む。

ジュンコ、ルリコ、ヒデコ、考え込む様子で登場。

ロク ああ、おはようさんです。

女たち、返事をせずに考え込んでいる様子のまま、椅子に座る。

ロク ……皆サン早いつすねえ。

女たち、答えない。

ロク ……俺、外しましょうか…ね。

ヒデコ 弁当！

ロク ハ？

ヒデコ 弁当は？

ロク 弁当？

ジュンコ もっ、もっ、もっ

ルリコ 元手がかかる。

ヒデコ ああ…。

ロク (マキコに) 何の話？

マキコ ……さあ。

ヒデコ ヒットネスクラブ！

ルリコ フ、ヒットネス。

ジュンコ だ、誰が教えるの？

ヒデコ ……。

マキコ なんの話なの？

ジュンコ ひっ、ひっ、

ジュンコ・ルリコ・ヒデコ 昼間。

マキコ 昼間？

ヒデコ 昼間この店はカラ。だからこの空間を生かしてなんか商売をするのよ。

マキコ 商売？

ルリコ オーナーが帰ってくるまでこの店を閉めるわけにはいかないわ。

ロク 帰ってくるんですか…ね？

ジュンコ・ルリコ・ヒデコ かつ、かつ、…帰ってくる。

ロク ……。

ヒデコ だからそれまでなんとかして保たせるのよ。そのためにはあたしたちの手で稼  
ぐしかないのよ。

ロク はア…けど商売ったって、そんな簡単に行かないでしょ。  
 ヒデコ だからこうやって考えてんじゃないの。あんたもなんか考えて

ロク え。

ヒデコ 早く。

ロク えーと…

ヒデコ マキちゃんも。それでいいね？

マキコ …うん。

ヒデコ 力を合わせてガンバリましようね。

マキコ (なにか吹っ切れたように) わかった。

ヒデコ (ロクに) 考えたッ？

ロク うっ。

ジュンコ ヒデオレッツ、レンタルは？

マキコ ヒデオどっからくるの？

ジュンコ みつ、みんなの集めて…

ヒデコ …ヒデオデッキ持ってる人。

ロク だけ手を挙げる。

ヒデコ …ダメじゃん。

ルリコ (店を見回しながら) レンタルスペース…。

ヒデコ うーん。

マキコ あ、芝居の稽古場とか…

ヒデコ ダメだあいつら貧乏だから。

マキコ ダメですかね。

ヒデコ ダメ。話にならない。

外で男が争う声、ドタバタと物音がする。

声(木戸) いたたたた！ はなせよ！ オイ！ ちょっと待て！ わかったってば！

声(染谷) 大人しくしろ、アヤシイやつめ。

染谷 後ろ手に木戸を捕まえて登場。

木戸 あいたたたた…だから話せばわかるってば…

染谷 問答無用。このビル荒らしが。警察に突きだしてやるからそう思え。

木戸、染谷以外の全員 ソメジュン！

染谷 ただいまー。

ロク おまえ帰ってきたのかア。

染谷 どうもご無沙汰っす。

ルリコ その人なに？

染谷 ドロボー！

木戸 泥棒じゃないって！

染谷 鍵こじあけて入ったろうが！

木戸 開いてたんだよ！

染谷 嘘つけ！ この鍵はな、俺しか持ってないんだよ！

ジュンコ あたしたちも、もっ、持ってるよ。

ヒデコ あ、あたし開けっ放しだったかも。  
木戸 ほら！

染谷 じゃあなんだってこそこそ事務所のなかなんか覗いてたんだよ！  
木戸 だからなせばわかるって。

染谷、片手だけ放してやる。木戸、名刺を取りだし、染谷に渡す。

染谷 ……毎朝新聞……社会部……新聞記者？ あんたが？

木戸 そう！

染谷 ……木戸、仙一。

木戸 そうそう！

染谷、木戸を放す。

マキコ 木戸…？

ヒデコ 新聞記者がいったいなんの用なのよ。

木戸 ……。

ロク 取材でもする気かよ。

木戸 いや……仕事じゃないんだ。

ジュンコ じゃ、じゃあ、なに？

木戸 ……この店に……山田真樹子さんて、いますか？

一回、マキコを見る。

木戸 ああ。木戸です。ぼくが木戸仙一です。

マキコ ……。

木戸 探しましたよ。

マキコ ……。

ヒデコ ……マキちゃん？

マキコ ……義兄さん…？

マキコの言葉で、全員が木戸を見る。

木戸 ……戻ってきてほしいんだ。……お義父さんがね、倒れたんだよ。

マキコ ……姉さんは……

木戸 入院してる。……ああ、彼女はだいじょうぶ。……実は子供が産まれたんだよ。君の……姪っ子だ。

マキコ 姉さんが……子供を……

木戸 高齢出産だからね。まだ退院できないんだ。……どうにもならないんだよ。

マキコ ……。

木戸 真樹子さん。君が家を出てからぼくは君の姉さんと結婚した。君とはこれが初対面だけど……でもこれは君のお父さんのことなんだ。……頼む。君に……戻ってきてお義父さんの面倒をみてほしいんだ。

木戸、膝をついて頭を下げる。

木戸 お願いします。

マキコ ……。

マキコと他の全員が言葉をなくしている。  
明かりがかわり、人々が去っていく。  
そのあいだを縫って道化が登場。

## ACT5 ミツバチ

道化 …一目出会ったその日から、手に入らないものもある。高嶺の花と諦めて、下を向いたら落ちていた。思わぬところに芽生える恋。

再びお嬢の格好をした児島が出てきて二人して踊りながら退場していく。

道化 ムラサキを襲う閉店の危機。…マキコに襲いかかる現実からのボディブロー。…果たして運命やいかに？

道化、児島、手を取り合って退場。

開店前のムラサキ。

女四人、資料や本をそれぞれ読んだりしながら、登場。(ステージ上だけでなく、舞台全体を使う) ヒデとロクはブースでダベっている。

マキコ …だから、調査員というヒトが来るわけだよね。

ヒデコ それっていきなり来るわけ？

マキコ いきなりってことないんじゃない？

ヒデコ 何時頃くるわけ？

ルリコ ねえ、お茶とかお菓子とか出したほうがいいのかな。

マキコ 誰に？ 調査員に？

ルリコ やっぱり印象をよくしたほうが…

ジュンコ いっ、いっ、いっ、嫌なやつだったらどうする？

ルリコ 茶髪にしていると？

ジュンコ がっ、がっ、顔グロとか…

ヒデコ そんな調査員いないだろう。

ジュンコ そっ、そうなのかな…(真剣な顔で考え込む)

マキコ …それで調査員が質問した結果をもとにコンピューター判定するわけね。

ヒデコ …コンピューター判定ってなによ？

マキコ …なにって…コンピューターで判定するんでしょう。

ヒデコ …。

マキコ だから…そういうプログラムがあるわけでしょ。

ヒデコ ああ、プログラムか…。(考え込んでいる)

ルリコ ねえねえねえっ！ しゅっいがメーワクしているサーテクニクって…どんなの？

マキコ なにそれ、そんなのあるの？

ヒデコ …奥の倉庫にさ、誰も使ってないコンピューターあるじゃない。あれじゃダメ？

マキコ ダメ？ って…なにが？

ヒデコ あれでもいいの？

マキコ ソフトがないとダメなんじゃないですかね。

ヒデコ だから、ソフト買えばいいんじゃないの？

マキコ 売ってるんですかね？

ジュンコ ねっ、ねっ、ねえ、たっ、たっ、たとえばさ、もしおっ、おっ、おっ、おっ、お歯黒

の調査員が来たらさ…(なぜか不安そう)

ヒデコ あんたまだ言ってるの…？

マキコ だいじょうぶ、それはゼツタイいない。

ルリコ …ねえ、もしもさ、ひとつの家族にふたり、寝たきりの人とかいたとするじゃない？ そつすると、ちゃんとひとりひとりにヘルパーってついてくれるのかな。

マキコ おんなじ家にいるんだからまとめちゃえ…ってことは、

ルリコ・マキコ …ないわよね。

ヒデコ ねえ、だいたいさ、これ誰が言い出したのよ。

ジュンコ なっ、なっ、なにが？

ヒデコ この制度。誰がいつ考えたの？ あたしに断りもなく。

ジュンコ なっ、なんで、ヒッ、ヒデコさんにごっ、ごっ、断んなきゃなんなの？

マキコ 『介護保険料を払うのは四十歳以上の人です』…なんで四十歳からなんだろ。

ヒデコ ああ、あたしもそれ思った。

マキコ 基準がわからないですよね。どうせならもっと…

ヒデコ うん、六十くらいでもいいよね。

マキコ え？

ヒデコ いや、六十五でもいいか。

マキコ え、いや、そうじゃなくて…もっと若いときから払ってもらったほうがいいんじゃないのかなって。

ヒデコ え？

マキコ え？ いや、だから二十歳とか、二十五とか。

ヒデコ なんて？ そんな年で寝たきりになったりする？

マキコ …ヒデコさん、保険の意味わかってます？

ヒデコ …。

ルリコ ああっ！

ヒデコ なによ。

ルリコ 田中小実昌さん亡くなったんだ！…知らなかった…。

ヒデコ あんた、なに読んでんのよ。真面目にやんなさいよ。

ジュンコ …だっ、だっ、誰なんだ？

ルリコ うっうっ…コミさん。

ジュンコ かつ、かつ、悲しんでいる…。

ルリコ いいの、ほうっておいて…。

マキコ ねえ、これってさ、一割負担するんだ、結局。

ジュンコ ねえ、そっ、その一割って、いつ、いつ、いつ誰にど、どっ、どうやって払うの？

マキコ うーん。

ルリコ …ファンでした、コミさん。

マキコ だから誰なんだ…。

ヒデコ ダメだッ！ ごっつしても埒あかないわ。とりあえずあしたまでに、みんな自分の集めた資料をもう一回よく読んでくること。とにかくあたしらが詳しくならないことにはどうにもならないんだからね。いい？

一同 ハイ。

ヒデコ さあ、そろそろ店開けるよ。

一同 オウッ。



女たち、退場。入れ替わりに児島、染谷（ふたりとも仕事着）登場。  
染谷は手にした本をめくっている。

児島 それで結局なにをやることになったんですか。

染谷 ん？ コンサルタント。

児島 コンサルタント？

染谷 もうすぐ介護保険つてのが始まるだろ。制度がわりでいろいろな情報が求められるってわけだよ。それでコレ。

児島 なんでそんなことになったんです？

染谷 マキちゃんのお父さんな、座骨神経痛で歩けなくなっちゃったんだそうさ。それでその後、そういう話になっちゃってさ。

児島 そういつ話つて。

染谷 家族の話とか…、親が寝たきりになったらどうするとか…。まあヒデコさんたちは自分のそういう話はしないんだけど…

児島 誰がするんです？

染谷 俺。

児島 …。

児島 …俺実家に帰ってたじゃない。実はそれ関係なのよ。

染谷 染谷さんも、親が？

染谷 爺ちゃん。ボケは前からだったんだけど、とうとう寝たきりになっちゃって…親はまあ、戻ってこいって言うわね。

児島 染谷さん実家は…

染谷 おいら姫路。親はまだ両方働いてんだよな。で、誰が爺ちゃんの面倒を見るかってことになって…マアおさまりの世代間闘争だよ。

児島 なるほど。

染谷 そのときさんざん話題になったのが、コレってわけ。（本を示す）

児島 『わかりやすい介護保険』…。

染谷 たまたま持ってたんだよね。そこでついにヒデコさんに「カツ」と…

児島 降りてきたんですね。

染谷 その通り。

児島 ふうん…。介護保険コンサルタントですか…。儲かるんですかね？

染谷 さアな。でもまあ、ダメでもととってことだアね。

児島 マキさんどうするんですかね。

染谷 （首を横に振る）家にはどうしても帰りがたくななんだそうさ。

児島 その、義理のお兄さんって？ あきらめたんですか？

染谷 いやア、あれはあれでかなり困ってたみたいだからな…。たぶんそう簡単には…。

木戸、登場。

木戸 真樹子さん！ 頼むよ！ 頼むから戻ってきて！

染谷 …諦めないんじゃないかな…。

木戸 おーい！ 頼むよー！ お願い！

染谷 ちょっとちょっと。その新聞記者。店のなかで大声出さない。

木戸 あああ君。頼むよ。君からもなんとか言ってくれよ。お願い。

染谷 お願い、たつて本人がイヤだっていうもんは、どうしようもないじゃないですか。

木戸 そう言わずに。困ってるんだよ、ホントに。頼むよ染谷くん。

染谷 いつの間に名前まで憶えたんですか。

木戸 君からも頼むよ、児島くん。

児島 あ、ぼくまで。なんで名前知ってるんですか。

木戸 そりゃ俺記者だもんさ。調べるのは得意なの。

染谷 へえ。それじゃ、この店があと一月（まひつ）でどうなるかも知ってます？

木戸 え？ どうなるの？

染谷 知らないんじゃないんです。

木戸 どうなるのよ。

染谷 さあて、そろそろ仕込みにかかるうぜ。

児島 はい。

ヒデ、登場。

ヒデ 早うっす。

児島 おはようございます。

染谷 ういっす。

ヒデ おお、帰ってきたんだね？

染谷 しらじらしい。俺が帰った日、ブースにいたじゃないですか。

ヒデ あ、知ってた？

染谷 タ又キ寝入りしてたでしょ。

ヒデ バレましたか。

木戸 あああなた。あなたからもお願いしますよ！

ヒデ うん、いいよいいよ。

木戸 えっ。

ヒデ ちょっとブースに上がってきてくれる。

染谷 ヒデさん、いいんですか？

ヒデ ちよつど手伝いほしいと思ってたんだ。手がたなくなってるさ。こっちおいで。操作教えてあげる。

木戸 いや、あの…

ヒデ あれえ、いいのかな、マキちゃんに口添えしてあげられなくても。

木戸 いや、お願いします。なんとか。

ヒデ おいで。

ヒデと木戸、一緒にブースに上がる。

染谷 いったらっしやあい…。(児島に)ほれ、いくぞ。

児島 あ、はい。

染谷、退場しかけ、慌てて出てきたジュンコとすね違つ。

染谷 おっと。

ジュンコ あ、ごめんっ。

染谷 ジュンちゃん、着替えなくていいの？

ジュンコ うん、ちよ、ちよっと！

染谷、退場。 児島、通り抜けていくジュンコに声をかける。

児島 あのと、ジュンコさん、どうしたんですか慌てて。

ジュンコ んんっ？ あっ、児島くん。

児島 なにか？ 買い物ですか？ 俺行ってきましようか？

ジュンコ ああ、うん、そうだ、おっ、お願いしちゃっていい？

児島 なんなりと。

ジュンコ コピーしてほしいのよ、これ。

児島 なんですか？…ああ、これコンサルタントの…

ジュンコ そう、チッ、チッ、チラッ、チラッ

児島 チラッ、チラシ。

ジュンコ マネしないでよう。

児島 すいません。

ジュンコ ヒデコさんに頼まれてたの、チラシ作り。でもちよっと、じっ、じっ、

児島 ジンギスカン。

ジュンコ ちがうっ。自信がないのっ。

児島 上手じゃないですか。このイラストけっこういけてますよ。

ジュンコ そっ、そっかな…

児島 このヘリコプターなんか感じててるし。

ジュンコ ちがう！ それミッ、ミッ、ミッ…

児島 …あ、ミサイルか！

ジュンコ ミツバチ！

児島 …。いけてますよオ！

ジュンコ …。(ガクガクしている)

児島 あの、よかったら俺描きましようか？

ジュンコ ほっ、ホント？

児島 はい。…俺、ちょうどジュンコさんに話したいこともあったし。

ジュンコ え？

児島 いや、なんでもないです。手伝いますよ、チラシ。

ジュンコ (嬉しそうにニッコリして児島の腕をつまむ)…。

児島 はは…。ミツバチ、うん。見える。

ジュンコ じゃっ、じゃあ…お店終わったらね。

児島 はい。

ジュンコ (戻りつつ) ショー、頑張ろっね。

児島 はい。

ジュンコ、退場。

道化、背後に登場して児島の様子をみている。

児島 ……ミツバチ、か。 ……なんでミツバチ…？ (道化と目が合う)…わ。

道化 …。(おいでおいで)

児島 …。(観念して頷ぎ、うついていく)

道化、児島、退場。  
暗転。

ACT 6 純子

開店前のムラサキ。

ヒデコ、マキコ、ルリコ（私服）がいる。

ヒデコ ジュンちゃんどうしたの？

ルリコ さあ…。

ヒデコ しょうがないな。よし、じゃあとにかくはじめよう。それではいままでの研究

結果発表！ まずマキちゃん。

マキコ えーと、なにかから話せばいいのか…。

ヒデコ 基本。なにこともまず基本。

マキコ 基本はですね…まず介護保険料を払うのは、四十歳以上の入デス。

ヒデコ・ルリコ…。（続きを待っている）

マキコ…。

ヒデコ…それで終わりじゃないでしょうね。

マキコ え。いや、なんか質問があるかなと思って…。

ヒデコ 質問は。

ルリコ う。（拳手）

ヒデコ ルリちゃん。

ルリコ どうしても払わなきゃダメ？

マキコ 義務みたいですよ。最初は二十歳以上の入全部に払わせる案もあつたみたいですよ。けど、やっぱりその年齢だとピンとこないだろうということとでやめちゃいました。それで四十歳から六十四歳までを第一号被保険者、六十五歳から上を第二号

被保険者として…

ヒデコ（拳手）はいッ。

ルリコ ヒデコさん。

ヒデコ ヒホケンシヤってなによ。

マキコ…えーと、被保険者というのは、要するに介護が必要になったときに保険サービスが受けられる人のことです。

ヒデコ つまり権利のある人たちってことだ。

マキコ イコール保険料を払う人ってことですね。それでそれには第一号と第二号の二種類があるわけです。ヒデコさんが第一号、ルリちゃんが第二号とします。

それぞれポーズをとる。

マキコ はい。ではまず第二号。あなたは年齢は四十歳から六十四歳。女盛りですね。あなたは保険料をどうやって払うか？ 健康保険料に上乗せです。あなたが会社員なら給料天引きです。その場合半分は会社が負担しますね。自営業なら国民健康保険に上乗せです。この場合半分は国が負担します。それからあなたが専業主婦ならば、えーと…

マキコ、いったん引ッ込んでロクを引ッ張ってくる。

ロク（口）に歯ブラシをくわえている（な、なに…）

マキコ、ロクをルリコの横に立たせる。

マキコ はい、あなたはこの人の扶養家族とします。

ロク はあつ？

マキコ コレ（ロク）が会社員ならあなたの分はコレの給料天引きです。

ロク コレ？

マキコ コレが自営業なら国民健康保険上乘せで、あなたの方もまとめて払います。コレが年下ならあなたは姉さん女房です。

ロク なんの話だ…。

マキコ ちなみにもしコレがあなたの息子だった場合も、息子の世話になっている場合は主婦の場合といっしょです。次に第一号。

ヒデコ はい。

マキコ あなたは六十五歳以上です。

ヒデコ ケンカ売ってんの…？

マキコ あなたの場合は年金から天引きです。ただしあなたの年金がとも少なかったり、障害年金やら遺族年金やらの場合、役所に直払いです。

ロク 俺も帰っていいの…？

マキコ もしあなたが納められないときは…（ロクを引っ張ってくる）コレがあなたの旦那です。コレが払います。

ロク だからコレって言うなよ！

ヒデコ ちよつと待って。独身だったら？

マキコ あなたが住んでいる家の世帯主が払う義務があります。

ロク 一人暮らしだったら？

マキコ 独身で一人暮らし、しかも保険料を支払えない場合は…介護保険の被保険者にはなれませんね。

ロク へえ…、厳しいんだな。

マキコ そついうときは生活保護とか、別の可能性を探ることになるんじゃないかな。ヒデコ なるほど。

マキコ えーそんで…、はい、あなた第一号、あなた第二号。被保険者ね。保険料を払っています。あなた（一号ヒデコ）は、介護が必要だと思ったら申請できま

す。必要ですか？

ヒデコ え？ いやあ、どうかな…（考え込む）

マキコ 必要ですか？

ヒデコ ちよ、ちよつと待って…。

ロク（ヒデコが真剣に悩んでいるので…なにを悩んでいるの？

マキコ あなた（二号ルリコ）。あなたも被保険者ですから必要だと思ったら申請はできます。ただし、

ルリコ ただし？

マキコ 介護保険でいうのは基本的には、年をとったことで出てくるいろんな不自由を助けるものなのね。あなた四十歳から六十四歳。まだ若いから、無条件じゃなくて原因が問題になるわけ。

ルリコ ああ、つまり年をとったことが原因になってない…

マキコ　そ。十五種類の病気が決まって、それにかかった場合はサービスが受けられるわけ。その十五種類の病気を特定疾患っていうんだけど、ええと…(メモを見ながら一気に)初老性痴呆、脳血管疾患、筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病、脊髄小脳変性症、シャイ・ドレーガー症候群、糖尿病性の腎症と網膜症と神経障害、閉塞性動脈硬化症、慢性閉塞性肺疾患、変形性関節症、慢性関節リウマチ、後縦靭帯骨化症、脊柱管狭窄症、骨折を伴う骨粗しょう症、ウエルナー症候群…です。

マキコ、息を切らしている。  
三人、呆然としている。

ヒデコ　いやあ…、さっぱりわからん。

ルリコ　呪文みたい…。

マキコ　あたしたちには呪文でも、これが生々しい現実である人もいるわけです。

ヒデコ　そりゃそうだ。

マキコ　この病気にかかっていて、それが原因で介護が必要な状態になっていれば、あなた(二号ルリコ)は介護保険サービスを受けられるってわけです。

ヒデコ　あたしは無条件。

マキコ　そう。あなたは原因は問題になりません。

ヒデコ　介護が必要かどうかという状態だけが問題になる、と。

マキコ　正解です。

ロク　なるほどね。

マキコ　まあ…基本でいうところかなあ。

ヒデコ　よし。枠組みは理解した。じゃあ、介護が必要になった！ あたしやなっただぞ！

さあどうすればいい？

ロク　元気だなあ…。

マキコ　それは実際の手続き編だから…

ルリコ　ジュンちゃんの担当。

ヒデコ　ジュンちゃんどこいったのよ。珍しいわね、あの子が来ないなんて。

ロク…あ。

ルリコ・マキコ・ヒデコ　ん？

ヒデコ　なによ、なんか知ってるの？

ロク　う、いや、なんでもないっす。……あのヤロウもしかして…

ヒデコ…まあいいや。じゃあ、続きはまた明日にしよう。休みのところお疲れさん。

マキコ・ルリコ　お疲れさまでしたー。

ヒデコ、退場。

ルリコ　あれ？　ねえ、ロクさんなんで休みなのにいるの？

ロク　ああ…昨日、ヒデと飲んでて…そのまま寝ちゃった。

マキコ　ヒデさんは帰ったんだ。

ロク　あそこ。(ブースで寝ている)…マキちゃんの兄貴もいたぜ。

マキコ…え。

ロク　なんだか毎日来てるな、アレは。ああ、そうか、そういえば…

ルリコ　なに？

ロク …マキちゃんのおヤジさんの病気、その十五口のうちに入らないんだってよ。そんな話してたよ、確か。そのときはなんのことがわかんなかったけど。

マキコ …。

ロク まだ六十三だからどうこうって、盛んに言ってたよ。そうか、つまり第二号ってわけだ。それであんなにクドクド言ってたんだなあ。

ルリコ (マキコを気にして) ロクさん。

ロク …。(マキコを見て) んじゃ俺、上がるわ。お疲れ。

ロク、退場。(ブースにあがる)

ルリコ マキちゃん。

マキコ うん。

ルリコ …行く。

マキコ …(ルリコに頷いて見せる)

ふたり、退場  
明かり変わる。

児島(私服)登場。キョロキョロしている。  
ジュンコ、登場。

ジュンコ …。

児島、人を待っている様子でステージに座っている。

ジュンコ、後ろからそっと近づく。

児島の耳を塞ぐ。

児島 …普通目隠ししませんか？

ジュンコ バツ、バツ、バツ

児島 よく聞こえないんですけど。

ジュンコ (耳から手を離して) バリエーション。

児島 あ、聞こえました。

ジュンコ (児島の隣に座る) 児島くん、イッ、イッ、イラスト、ありがとね。

児島 あんなんでよかったですか？

ジュンコ …(OKサインをだす) すっすっ、い、じょうず。

児島 よかった。

ジュンコ …。

児島 …。

ジュンコ …はっ、(話ってた) …と一言おつやした)

児島 あのっ、(かぶる) あ…

ジュンコ …。はっ、話ってた…なっ、なっ、

児島 ジュンコさん、ひとつ聞きたいことがあるんですけど…。

ジュンコ なっ、なっ、なっ、(あがっている)

児島 あの…無理してしゃべらないでください。ぼくが勝手にしゃべりますから、返事  
だけしてくれれば…。

ジュンコ …(首を縦に振る)

児島 片桐っていつ名前に覚えはありませんか？

ジュンコ ……？

児島 片桐虹彩です。こうさいは虹に彩るって書くんです。

ジュンコ ……

児島 知っていますか？…いや、覚えていますか？ 何年前か、ある新興宗教の教祖だった人なんです。今はもう解散しちゃってるんですが…。

ジュンコ ……

児島 ジュンコさん、ほくね、嘘つのが苦手なんです。ここに来て身に沁みました。だから、もう正直に言っちゃいます…。ほく、最初からジュンコさんがここにいらっしゃるの知ってて、それでここに来たんです。

ジュンコ ……

児島 探偵なんてかつこいいもんじゃないけど…なんでも屋つていうのかな。…あなたの居場所、今どうしているか、あなたの行方がわからなくなってから、どこでどうやって過ごしてきたのか…。それを調べるように、頼まれたんです。あなた…」両親に。

ジュンコ ……（相変わらず動かない。児島を見ることもしない）

児島 でもね、連れ戻してくれっていう依頼じゃなかった。ただどうしているのかわりたい。それだけでした。それであなたのこと調べました。…でも、どう調べてもわからない部分がある。入院していた病院を出たあと、あなたは片桐虹彩を教祖とする宗教団体に入った。その後のことがどうしてもわからない。ジュンコさん。

ジュンコ ……

児島 村崎という男は…この店のオーナーというのは、片桐教祖のことなんですか？

ジュンコ ……

ジュンコ、俯いている。  
体が、細かくふるえている。

児島 ジュンコさん…。

児島、そうつと近寄って、ジュンコの肩に触れる。

ジュンコ、感電したように体をふるわせて、猛烈に暴れ出す。

児島、慌ててそれを抑えようとする。

ジュンコ ああっ、あああっ、ああっ、ああっ…！

ジュンコ、児島を突き飛ばし、ステージの床を這い擦ってなにものかから逃げようとする。  
顔には恐怖が貼りついていてる。

ジュンコ ああっ、あうっ、ああっ…！

児島、おきあがって（どこかにぶついたらしく額を押さえている）ジュンコを追い、力づくで抱きすくめる。

ジュンコ あああああ…ああっ…！

児島 ジュンコさん…！ ジュンコさん…！ だいじょうぶです…。なにも…なにもしない。



ジュンコ、児島の腕の中で暴れる。  
 児島、パニックに陥った獣を宥めるように、唇を鳴らし、嘔き続ける。

児島　しーっ…だいたいようぶ…なにも…心配ないから…誰も…なにもしないから…

ジュンコの耳元で児島は嘔き続ける。  
 ジュンコは酸素を求めるように口をパクパクさせ、逃げ道を探して狂ったように目だけが動き続けている。  
 動きは止まっている。しかし児島は腕の力を緩めない。  
 ジュンコは児島の腕の中で硬直している。  
 児島は嘔き続ける。

児島　だいたいようぶ…もう…誰も…なにもしない…どこにも閉じこめない…注射も…ベッドに縛りつけたりもしない…ここにはそれをする人はいないんだ…だいたいようぶ…だいたいようぶだよ…

ジュンコの体の緊張がほどけていく、ぐったりと児島の腕の中で弛緩する。  
 児島も腕の力を抜く。  
 ステージの中央に座り込みんだふたりの息づかいだけが聞こえる。

児島の腕のなかのジュンコは、まったく<sup>む</sup>吃ることのない純子である。

純子　…今日、ぼくは夢を見た。夢のなかで、ぼくはひとり歩いていて。青い空が見えた。地面が見えた。白いズックが右、左、右、左と順番にあらわれては地面を踏んで、だからぼくは、歩いている。右、左、右、左。ぼくはひとりで歩いている。どうしてぼくはこんなところを歩いているんだろう、どうしてぼくはひとりで歩いているんだろう。右、左、右、左、右…。どうしてぼくは…。ぼく？ どうしてぼくなんて言うんだろう。お母さんが言った。ジュンちゃんは女の子だから。お父さんは黙っていた。お父さんはいつも黙っていた。お母さんはいつもニコニコ笑っていた。ジュンちゃんは女の子だから。右、左、右、左、右。順番に足が地面を踏む。歩いている。夢のなかで歩いている。それは誰だろう。ぼくは誰だろう。左、右、左、右。いつの間にか、歩いているぼくを、わたしは見ている…。

ぼくはわたしになって、ぼくを見ている。わたしは言う、ねえ、あなたは誰？ どうしてひとり歩いているの？　ぼくは振り向かずにただ歩く。左、右、左。わたしはまた言う、ねえ、待って、どこに行くの？　そっちは…そっちに行っちゃ駄目。駄目だよ。ぼくは振り向かない。ぼくは歩く。右、左、右、右、左、右…。駄目…駄目…駄目よ！

純子が激しく身動きする。それをそっと押さえる児島。

児島　…ジュンコさん。

純子　…目が覚めるといつも、私は泣いている。いつも。そして思い出せない。あの子は誰だったのか。あの子がどうなったのか…。でも本当は、本当は知っていた。あれは…あの白いズックの男の子は…私の弟…ずっと昔に死んでしまった。森のなか、足を滑らせて、崖から落ちた。私の目の前で。

児島　ジュンコさんあなたのせいじゃない、それはあなたのせいじゃない。お父さんもお母さんもそう言っていた。本当だよ。

純子 ……口ではそう言っていた。ジュンちゃんは女の子だから。そう言ったのに、声にならないもう一つの声がある。どうして男の子じゃないんだ、どうしておまえなんだ、どうしておまえが残ったんだ、どうして弟を…護ってやれなかったんだ…と。私はあの森から、弟と歩いてきたあの森から、出られなくなってしまうた。私ならよかった。私なら両親はこんなに悲しまなくてすんだ。口に出せないこと。口で言ってもらえないこと。わかっていてもどうにもできない…。私はしゃべることができなくなった。親は悲しんで、あちこちの病院に私を連れていった。ジュンコさん、もういい。

児島 宗教に頼った。そう…片桐虹彩…そんな名前だった。そう、私と同じような人たちがいた…、護ってもらえなかった人、必要なときに護ってあげられなかった人。有名なデザイナーだったのに逃げてきてしまった女の子…ああ…あれは…ルリちゃん…？…ピアノが怖いと言っていた女の子…

児島 みんな…？ みんなそこに？

純子 よく…思い出せない…でも…違う。オーナーは…オーナーは…教祖なんかじゃない…。オーナーは…

児島 じゃあ…誰なんだ？ 君を…君たちをここに連れてきたのは。

純子 ……オーナーは…戻ってくるよ…きつと。だってあたしたちを護ってくれる人だもん。ぜつたいに、ぜつたいに、もどって、くる…。

児島 ……

暗転。

## ACT 7 木戸

木戸がステージ上に座っている。  
ブースにヒデがいる。

ヒデ いいかなー？

木戸 オッケーです！

ヒデ そんじゃチエック行きまあす。

ヒデ、適当な音楽を出す。

ヒデ どのから聞こえてるー？

木戸、じつと聞いているが、両手である方向を指す。

ヒデ ホントにそこ？ よく聞いてよお。

木戸 …。(迷いはじめて手がふらふらする)

ヒデ どこだー？

木戸 …。(集中して聞きすぎて手が左右に分かれる)

ヒデ なんだそれ。

木戸 ギターはこっちです！ で、で、ドラムが…

ヒデ あのねー…ボーカルだけ聞いて、ボーカルだけ！

木戸 ………ここ！ ここです！

ヒデ ホントに？

木戸 ホント！…です！

ヒデ やっぱちょっとズレてんだなあ…。ハイ、オッケーでえす。

ヒデ、ブースから降りてくる。

木戸 もういいんですか。

ヒデ うん。ここホラ、ちょっとスピーカーの位置おかしいから、苦勞するんだよね。

木戸 付け替えたらどうでしょうね。

ヒデ 誰が？ 俺ヤダよ、あんな高いとこ登んの。俺脚立キヤタツに触るのもヤダもん。

木戸 はあ…。

ヒデ よいしょっと。木戸さんだったよね。あなた最近毎日来てるけど、会社行かなくていいの？

木戸 いやあ…その…

ヒデ まあどうでもいいんだけどさ。マキちゃんのこと、母ちゃんていないの？ その、倒れちゃったっていう父ちゃんの奥さん。

木戸 ああ、いるんですけど…やっぱり体が弱ってて、お義父さんの世話までは…

ヒデ へえ。深刻なんだ。で、あんたは仕事。あんたの奥さんは入院。そりゃあ確かにしんどいわなあ。同居？

木戸 同居です。だから真樹子さんが帰ってきてくれとええすねば…

ヒデ ふうん。

木戸 なんとか口添えしてもらえませんか？

ヒデ この店ね、もうすぐツブれるの。

木戸 え？

ヒデ もとものオーナーが店手放しちゃったらしくてね。まあそのオーナーってのも、どこのなにもんだかわかんないんだけど…。

木戸 …。

ヒデ だからこの子たち、みんな必死。なにせここでは生きていられないような子ばかりだから。

木戸 ここでしか？

ヒデ うーん…まあそれは言い過ぎかな。でもね、俺、傍<sup>ハタ</sup>で見えてき、あの子たちのこの店以外での生活って想像できないんだよね。

木戸 …。

ヒデ だからなんとなく思うよ。ムラサキってキャバレーはさ、お客のためにあるんじゃないかって、あの子たちのためにあるんじゃないかって。だから…

木戸 だから？

ヒデ まああんたも苦しいんだろうけどさ…一ヶ月待ってやってくんない？ ダメ？

木戸 …。

ヒデ ダメならいいのよ。俺は別にどっちでもさ。

木戸 だけど、もしコンサルタントがうまく行ったら…

ヒデ 行くと思う？ そんなに甘くないでしょうよ。

木戸 …。

ヒデ 思うんだけどね、あんなことでこの店が続けていけるようになるなんて、たぶん誰も思っていないんじゃないかな？

木戸 じゃあ、なんのために？

ヒデ さあ、そんなこと知らない。でもなんとなくそう思うね。あれはぎつと、なんかもっと別のものだと思うな。…まあどうでもいいんだけどね。…ほんじゃ。

ヒデ、軽く手をあげて、退場。

木戸、言われたことを考えている。

木戸 …あ、ヒデさん、ちょっと！

木戸、追って退場。

ヒデコ、ルリコ、マキコ、ジュンコ、染谷、児島、登場。

ヒデコ そーれーでーはー、研究発表その二。手続き編。いきましよう。

児島 えー、ジュンコさんの担当分ですが、ジュンコさんが発表するとやや時間がかかるので、ワタクシがスポークスマンとしてお話させていただきます。

ジュンコ ん（頷く）。

児島 アシスタントはワタクシの先輩である染谷準児さんです。

ヒデコ よっ。ソメジュン。（一同拍手）

染谷 なんてこんなことに…。

児島 それでは早速。はい、あなたは介護保険の被保険者です。今日から寝たきりになりました。

染谷 えっ。いきなりだなア…。（寝る）

児島 さあ、介護保険の申請をしましょう。してください。早く。

染谷 早くって…だって寝たきりなんだろ！

児島 その場合は家族の人がかわりに行きます。家族がないときは地域によっては…  
引っ込んでロクを連れてくる。  
ロクは歯ブラシをくわえている。

児島 ご近所の人に頼んでもだいじょうぶ。  
ロク もう…！

児島 ケアプランを作成する事業者に頼むこともできます。とにかく役所の窓口に行かないと話が始まりませんので、行きます。はい行きました。

ロク ごめんください。

児島 申請はけっこう簡単みたいですね。用紙は一枚。住所氏名とか、保険証の番号、主治医の名前なんかが必要です。ですね？

ジュンコ ン。

ロク 俺代理なんだろう？

児島 本人との関係という欄があります。

ロク 隣に住んでいる親切な好青年…と。

児島 嘘は書かないでください。

ロク なにイ。

ヒデコ 主治医いなかったらどうすんの？

児島 医者意見書は後で必ず必要になるんですよ。だからかかりつけがいなかったら、意見書を書いていくれる医者を探して、先に診察を受けておいたほうがいいです。そういう情報は役所にあるはずですよ？

ジュンコ ン。

ロク …あんたずいぶん楽しんでない？

ルリコ 意見書ってお医者さんの診断書みたいなもんでしょ？ お金かかるんじゃないの？

児島 介護保険手続きが目的なら、意見書は無料で書いてもらえます。…さて申請をしました。しましたね？

ロク お願いしマース。

児島 手続きがすんだら、その人がどういう状態なのか、調査が始まりますね。まず、都合のいい日を電話で打ち合わせたうえで、いわゆる訪問調査員が来ます。

ルリコ お茶とお菓子！

児島 そんなことよりも、きちんと状況を伝える努力が必要です。チェックシートはありますが、要は人間対人間ですから、ちゃんとコミュニケーションする努力をしましょう。

ルリコ ハイ…。

児島 妙に遠慮したり、逆にわかってもらえるだろうと甘えたりせず、正確に事実を伝えることを心がけるべきです。

ジュンコ ン。

染谷 なんか…いいこと言うなあ。

児島 あ、今のはぼくの個人的意見なんですけどね…。

一同 ほお…。

児島 な、なんですか…。

一同 いいえ。続けて。

児島 (咳払いして) 調査員は役所の人がかかる場合とか、委託された業者がかかる場合とか、地域によっていろいろです。いずれにしても研修を受けた人がきます。

染谷 俺いつまで寝てればいいのよ…?

児島 本人がうまく話ができない場合は、本人の状態をよく知っている人が立ち会うことができません。

染谷 無視か、おい。

児島 そのとき作る合計八十五項目の調査票がコンピュータに入力されて、一次判定の結果がでるわけです。

ヒデコ そのコンピュータなんだけど、どうなったんの？

児島 どうなってるのと言われても困りますが、まず時間の形で出るみたいですね。

ロク 時間ってなんだよ？

児島 一日に何時間の介護が必要か。その時間によって、介護のランクが出ます。

ロク ああ、例の「自立」とか「要支援」とか…

児島 それに「要介護1」から「5」。全部で七段階です。

ジュンコ ん。

ルリコ それで決まっちゃうわけじゃないんでしょ？

児島 もちろん。最終的にランクが決まるのは次の二次判定です。

染谷 それについては俺が詳しい。

ロク お、寝た切りに耐えられなくなったな。

ヒデコ なんてあんた詳しいのよ？

染谷 なにせ田舎でさんざん聞かされてきたからな。

児島 じゃあここはアシスタントに任せましょう。行け。

染谷 偉そうに…。あのね、二次判定は元ネタが三つあるの。ひとつは、コンピュータ判定の結果。ふたつめは最初の訪問調査で調査員が書いた特記事項、コンピュータに入らない分ね。んで三つめが医者書いた意見書。

ヒデコ ああ、そこでさっきの話になるわけね。

児島 いかにも。

染谷 その三つをネタにして、なんだっけな…、介護認定…

ジュンコ しつ、審査会。

染谷 そ。介護認定審査会…のが開かれて、そこで話し合ってきめるわけ。

ルリコ 誰が？

染谷 医者とか福祉関係の専門家…福祉施設の職員とかだよ。五人くらいで非公開でやるんだって。

ロク 民間人がやるわけか？

染谷 (頷きつつ) 市町村が任命するみたいですね。任期が決まってるんですよ。二年だったかな。爺ちゃん婆ちゃんの多い地域なんか、大変なんじゃないか？一件当たり五分くらいで判定しなきゃなんないらしいですよ。

ヒデコ 五分？ 短くない、それ？

染谷 そりゃ短い気はするけど…まあ平均時間だからなあ…。どうみたって要介護…って人は瞬間的に決まっちゃうんだろっしね…。

児島 地域によってそのあたりはいろいろ対策立ててるみたいですけど…やはり納得行かない結果になる人もいるでしょうね。

染谷 そしたらまあ「不服申し立て」ってことにならあね。

ルリコ どこにもウシタテるの？

染谷 いっこ上。認定審査会が市区町村でしょ。不満があればその上の都道府県に行くわけ。それでもまだ納得できなかったら…どうなるのかね？

児島 最終的には地方裁判所で訴訟を起こすことになりませぬ。そのへんも、地域によって苦情受け付けの仕組みが微妙に違うみたいです。

ヒデコ ひとつ思っただけだし、判定結果が出てから、状態が悪化することってあるわけよね。

染谷 ああ、そりゃよくなるより悪くなるほうが多いでしょうね。

ヒデコ どうする？

染谷 ……どうしましょう。

ヒデコ 頼りないわね！

児島 再認定の申請をすればいいんです。訪問調査のところからもう一回です。その場合は、一時的な悪化なのか、その状態がずっと続くのかが問題の焦点になります。…さて申請から一ヶ月以内に認定結果がでます。出ましたか？

ロク え？ さあ…

児島 結果はさつきも言ったように七段階のうちどれかです。軽い方から自立、要支援、要介護12345。

染谷 それなんだよねえ、違いが微妙でよくわからないのよ…。

児島 状態がひとそれぞれですからねえ…。とにかくこのランクわけによって、保険が降りる限度額が違つんで、必然的にどのような介護サービスを受けられるかに差が出てくるわけです。

ルリコ そのサービスの組み合わせがケアプランで、それを作るのを手伝ってくれるのがケアマネージャー。

ジュンコ ん。

染谷 わかつてきたじゃないの、ルリちゃん。

ルリコ そりゃあこの一ヶ月、こればかりだもん…。

ヒデコ よし、じゃあ次回はルリちゃんの出番だ！ ジュンちゃんお疲れ！

ジュンコ んん。

児島 主にぼくが疲れたんですけど…

ヒデコ この調子でもっと詳しく情報を集めていきましょつ。あたしたちが専門家になって、コンサルタントを成功させれば、絶対この店閉めずに済むようになるんだから。

ジュンコ・ルリコ・児島 おうつ。

マキコ やめて…

一回、ずっと黙っていたマキコを見る。

ジュンコ マッ、マキちゃん？

マキコ もう、やめて…

ルリコ マキちゃん…。

マキコ 信じてないくせに…誰も…

ヒデコ …マキちゃん。

マキコ 信じてないくせに…この店を閉めずにすむなんて…オーナーが帰ってくるなんて…ほんとに…誰も…思っていない…あたしだって…あたしだってほんとに…！

ルリコ そんなこと…そんなことないよ！

マキコ …ほんとにそう？ そつ言い切れる？…ねえルリちゃん。

ルリコ …。

マキコ 戻りたくないだけじゃないの？ そつじゃないって言い切れる？…あのときみたい…あそこに…教団の共同生活所に入ってきたとき、あなた口も利けなくらい怯えてた…あたしは他人全部が悪意のかたまりに見えて気が狂いそうだった…わかってるんでしょ？ ホントは思い出してるんでしょ？…？

ルリコ やめて…。

マキコ こんなことしてなんになるの？ 意味なんかないじゃない！ 全部嘘じゃない！

い！ ヒデコさんだってジュンちゃんだって、みんなあそこにいたじゃない！

ルリコ やめてよッ！

一同、声がない。

マキコ ……ごめん、あたし…あたし…。

ジュンコ ……うっ、嘘なんかじゃ、ない。……い、意味なくなんか…ない。

マキコ ……ごめんなさい。

マキコ、走って退場。

ルリコ マキちゃん！（追おつとする）

ヒデコ ルリちゃん。（振り返るルリコに、首を横に振る）…行きましょ。

ヒデコ、ルリコ、ジュンコ退場。

児島、後を追おつとする。

ロク ほつとけ児島。

児島 …でも…！

ロク そつとしいてやんな。誰にでも…潮時つてもんがあるんだよ。

児島 …。

ロク おまえもなあ…。親切な好青年の忠告は聞いとくもんだぞ。

児島 …。

ロク おい。ソメジュン。

染谷 んっ。

ロク なに馬鹿面してんだ。口閉じる。今日は店休みだ。閉店の看板だしとけ。

染谷 ういっす。

ロク …じゃあな。

ロク、退場。

染谷、児島、それぞれ別方向に退場。

明かりが変わる。夜。須王登場。誰もいないステージを見ている。  
木戸、登場。

須王 （気配に気づいて）おや…。

木戸 今日は休みですよ、店は。

須王 ええ、知ってますが…あなたは？

木戸 木戸仙一といいます。



須王 ああ…あなた、真樹子さんの…  
 木戸 よくご存じだ、須王さん。…ですよね？  
 須王 私を知っていらっしやる？  
 木戸 ええ。調べましたから。この店をお買いになったんだそうですね。  
 須王 ええ。  
 木戸 村崎さんから？  
 須王 そうです、村崎さんから。  
 木戸 …契約書の写しを、私にも見せてもらえませんか？  
 須王 どうしてです？  
 木戸 確かめたいんですよ、村崎さんという人がどういう人なのか。  
 須王 それはわたしも知りたいな。どうしてこんな店をやっていたのか。  
 木戸 どうして店をやっていたのかは、なんとなく理解しています。  
 須王 …。  
 木戸 片桐虹彩…。一時話題になりましたね。星の数ほどある新興宗教の教祖。真樹子さんだけじゃない、秀子さんも純子さんも瑠璃子さんも、この店の女性たちはみんなそこにいたんですね。  
 須王 ああ…、木戸さん、そこまで知ってらっしやるんなら…  
 木戸 ぼくがわからないのは、そのなぜじゃないんです。  
 須王 どのなぜですか？  
 木戸 なぜ、村崎さんがこの店を今になって手放したのか、なぜキャバレー・ムラサキを今になって解体しようとしているのか。どうしてでしょう？  
 須王 …そう、なぜでしょうね。本当に…それはたぶん…  
 木戸 たぶん？ なんですか？  
 須王 本人に聞いてみるのが一番いいでしょう。  
 木戸 …聞けますか？  
 須王 …（黙って木戸を見ているが、目をそらしてぼつりと）…明日で、一ヶ月がたちます。  
 暗転。

## ACT 8 秀子

ステージ上にひとり、ノートを手にした木戸が座っている。

木戸 …「二〇〇〇年三月二十八日。医療保険と介護保険の適用をめくって。現在訪問看護を受けていて他の介護保険サービスを希望しない人、あるいは自立という判定が出そうな人のなかには、要介護認定申請をしない人は多い。しかし、医療保険で訪問看護が受けられなくなるかもしれないと不安になり、三月に入ってから慌てて申請する動きもある。医療保険による訪問看護がどこまで認められるか、関係者に不安が広まっている…」。(ページめくる)

ルリコ、ジュンコ、登場。

木戸 …「二〇〇〇年四月。ケアプランに基づくサービス提供が開始された。ケアプランに組み込まれたサービス内容について、利用者とサービス事業者の間の認識のズレが表面化し、ケアマネジャーに苦情が持ち込まれている。介護保険制度の基本的理念では、サービスの最終的な選択決定権は利用者にある。サービス事業者に注文をつけるのも、基本的には利用者自身のはずである。ケアマネジャーの役割は、それを助けることにある、と考えるべきではないだろうか…」。(ページめくる)

ルリコ、登場。

木戸 …「二〇〇〇年五月十日。ケアマネジャーは最初の給付管理票を提出する。これで一連の管理業務を一通り終えた事になる。ケアマネジャーのなかには、連日残業、三月から休みなしが続いている人も少なくない。こんな状態が数ヶ月続いたらどうなるのかという悲鳴があがっている。事務手続きが追いつかないため、サービス追加など、月中の変更には応じられないと言っケアマネジャーもいる。始まったばかりの制度が、どう現実に対応していくのか、これからその正念場である…」。(ページをめくる。厚いノートにぎっしりと字が埋まっている) …ほんとに…よく勉強したんだね。

ルリコ うん…。

木戸 がんばったんだ。…この調子じゃないか。きつと、うまく行くよ。

ルリコ ありがとう…。

木戸 …元氣ないね。

ルリコ うっん…だいじょうぶ。

木戸 ヒデコさん。…真樹子さんのこと…すみませんでした。

ヒデコ (笑って) どうして木戸さんがあやまるの？

木戸 なんだか…大切な仲間をぼくが無理矢理…

ヒデコ やめて、木戸さん。

木戸 …。

ヒデコ あの子がどうするかを決めるのは、あの子自身。あたしたちでも、あなたでもない。…そつでしょ？

木戸 …そつですな。

ヒデコ だから…、ね、あやまつたりしないで。  
木戸 …はい。

須王、登場。

須王 こんにちは、皆さん。

ヒデコ 一月、経ちましたね。

須王 ええ、そうですね。…資料、読ませていただきました。面白かったです。  
ヒデコ …。

須王 まさかこんなことをはじめるなんて思ってませんでしたよ。とても興味があります。  
す。でも…

ヒデコ でも…？

須王 あなたがただで、この商売やっていけますか？

ヒデコ …。

須王 この店を続けていけるだけのお金を稼げますか？

木戸 それは…やってみなきゃわからないじゃないですか。

須王 その通りですね。やってみなければわからない。でもそれはビジネスの世界では  
通用しないセリフです。それは木戸さんもおわかりでしょう。

ヒデコ はつきりおっしゃってください。結論を。

須王 そうですね。

一同、黙って須王の言葉を待っている。

須王 どうです。この私を使ってみませんか？

ヒデコ ……？

須王 介護保険コンサルタント。悪くないですよ。とても可能性がある。でも可能性を  
伸ばすためにはキチンとやっていかなければ。私が顧問についてアドバイスしま  
すよ。そうすればこれはきつと成功します。いずれはそれだけでやっていけるよ  
う…。

ジュンコ やめてっ！

須王 …。

ジュンコ ちがつ…ちつ、ちがつ…。

ルリコ …須王さん。

須王 はい。

ルリコ 私たちが望んでいるのはそんなことじゃないんです。

須王 そうですか？ ではどんなことですか？

ルリコ 私たちが望んでいるのは…

須王 なんですしょう？ どうぞおっしゃってください。あなたの希望はなんですか？  
崎さんが戻ってくるんですか？ このまま店をやっていることですか？

ルリコ …（ゆっくりと首を横に振る）

須王 ジュンコさんは？

ジュンコ …。

ヒデコ もついいのよ。…答えなくてもいい。

須王 …。

ヒデコ いいの。もうわかっているの。そうでしょ？ ルリちゃん。

ルリコ …。  
ヒデコ ジュンちゃんも。

ジュンコ …。

ヒデコ … 今日で、この店は…、キャバレー・ムラサキは…

ルリコ いやよ！

ヒデコ …。

ルリコ いや…

ヒデコ ルリちゃん。あたしは決めた。あたしここを出て行く。

ルリコ ヒデコさん。

ヒデコ あなたも自分で決めなさい。

ルリコ、うつむいて動かない。

やがて心を決め、顔をあげ、まっすぐに、出ていく。

ルリコ退場。

ジュンコ ヒデコさん…あ、あたし…。

ヒデコ 行きなさい、ジュンちゃん。外に見島くんがいるから。あなたを待ってるから。

ジュンコ ………。

ヒデコ あなたといて、楽しかった。

ジュンコ、踵を返して、振り返らずに歩き出す。退場。

ヒデコ 木戸さん。

木戸 …。

ヒデコ マキちゃんに伝えてください。あなたのピアノが、とても好きだったって。

木戸 …わかりました。

木戸、退場。

須王とヒデコが残っている。

須王 終わりましたね。

ヒデコ あなたのおかげです。

須王 そんな…。わたしはあなたの言われた通りにやっただけですから。

ヒデコ 本当にお世話になりました。

須王 ひとつ聞いてもいいですか？

ヒデコ ええ。

須王 これから…どうされるんです？

ヒデコがゆっくりと須王を振り返る。それは秀子である。

秀子 …沖繩にね、おばあちゃんがいるんです。たったひとりの肉親です。八十歳で、ピンピンしてて、浜辺で海草なんか拾って暮らしてるの。ずいぶん会ってないけれど、たぶん今でも元気だと思っ。

子供の頃は、できないことなんてなんにもないと思ってました。自由で、どこまでだって行けて、なんだってできる。大きな麦わら帽子をかぶって男の子みたいに泥だらけになって、男の子といっしょになって駆け回っていました。沖繩には基地があるでしょう？ そのころは学生運動が盛んで、いろんな人が島に来て…私が十七歳のとき、そういう相手と恋をした。(おかしそうに、また懐かしそう

に笑う。目が鋭くて、頭は空っぽってタイプよ……。でも、私を広い世界に連れ出してくれると思った。…東京に出てきて、全部が変わってしまった。目つきが鋭いだけの男と別れて、また別の男とつきあって…とどん疲れて…わたしは、とどん平凡な女になっていった。

変えたかったの。ただ変えたかった。裏返したかった。力を取り戻したかった。人を救うことなんて、ほんとはどうでもよかった。わたしはわたしの力を信じたかっただけなのかもしれない。救われたかったのは私だったのかもしれない。

須王 でも、本当に救われた人もいますよ。私みたいに…。

秀子 でも結局は元の黙阿弥でした。これで全部綺麗サツパリ…。

須王 こうして最後までやり遂げたじゃないですか。

秀子 あの子たちだけは…なんとかしてあげたかった…。あのまま放り出したくなかった…。あの子たちが世間に戻っていく前に、最初の状態に戻ってしまう前に、ここが…この場所が必要だった…。

須王 不安じゃありませんでしたか？「この居心地のよさから逃げられなくなってしまっ可能性もあった。

ヒデコ ジュンちゃんに描いてもらったチラシ…。

須王 蜂の絵…ですね。

ヒデコ あれを見て、私、みんなが思い出しはじめていると思った。あのミツバチのデザインは…

須王 ……教団のトレードマークでしたね。

ヒデコ 飛びたかったの、あたし。大事なもののために飛びたかった。自分が護るべきもののために、まっすぐに、…ミツを運んで、空を…。そう思っていました。

須王 ……。

秀子 だから…一度帰ります。あそこに。それからもう一度、帰ってきます。いつか。いつかきつとここに帰ってこようと思っています。…それまで（須王を見る）

須王 （頷いて）…それまで…

秀子 それまでどうぞ、お元気で。

須王 あなたこそ、どうぞお元気で。…片桐虹彩…いいえ、片桐秀子さん。

秀子、退場していく。  
須王を残して、暗転。

## ACT 9 最後のショー

【二〇一×年】

木戸と染谷がいる。  
木戸の話に染谷が聞き入っている。

染谷 ……本当に……

木戸 ……ああほんとの話だ……そういうことさ。

染谷 ヒデコさんが……

木戸 あの人が、片桐虹彩だった。でもあの方はオーナーじゃなかった。

染谷 ……それじゃあ……オーナーは……村崎っていう人は……

木戸 うん。いなかっただ。そんな男は存在しなかった。教団が解散したとき、教祖

片桐虹彩が、最後に彼女たちにそう信じこませたんだ。

染谷 信じられないですよ。

木戸 たぶん、あの方は、最後の最後でけじめをつけたかったんだらうよ。

染谷 けじめ……ですか。

木戸 平凡な言葉だけだな。

染谷 マキさんや、ルリちゃんを救いたかったってことですか？ ムラサキは……この店

はそのための……クッションだった？

木戸 いや……たぶん、あの方は自分を救いたかったんじゃないかな……。

染谷 よく……わかりませんね、正直。

木戸 そりゃあ、俺だつてさ。でも……

染谷 ……でも？

木戸 いや……それでいいんじゃないか？ わかったふりをするよりはさ。

染谷 ……そう……ですね。

染谷、立ち上がって、木戸に頷き、出ていく。  
木戸も違う方に歩き出す。

ピアノが聞こえる。

女たちが登場する。

ブースにはヒデとロクがいる。

児島が飲み物を載せたトレイを持って歩く。

音楽が始まり、道化が飛び出す。

最後のショーが始まる。

木戸と染谷はそれを見ている。

音楽が静かなものへと変わっていく。

幕。